第２章　宮古市の概要

１　現況

（１）地勢

本市は、岩手県沿岸部のほぼ中央に位置し、市の西側を県都盛岡市と接し、南側は花巻市・遠野市・山田町・大槌町と、北側は岩泉町と隣接します。本州最東端の重茂半島鮭ヶ崎から区界峠まで東西約 60 km、川井地域の白見山から田老地域の摂待漁港まで南北約 50 km、総面積は 1,259.18 平方 km で、岩手県の総面積 15,278.86 平方 km の 8.2％を占めています。市域のほとんどが北上山地に属し、市域の 92％が森林となっています。

東に宮古湾を隔てて太平洋を望み、名勝「浄土ヶ浜」は、三陸海岸を代表する景勝地として、多くの観光客が訪れています。三陸海岸は 1955（昭和 30）年５月に陸中海岸国立公園に指定され、東日本大震災後の 2013（平成 25）年に「三陸復興国立公園」と名称が変更されました。西は北上山地にいだかれ、1982（昭和 57）年に北上山地の最高峰、早池峰山（標高 1,917 m）を中心として「早池峰国定公園」が指定されています。市の西端に位置する兜明神岳（標高 1,005 m）と岩神山（標高 1,103 m）の谷間を水源とする閉伊川が、山間を蛇行しながら東に向かって流れ宮古湾に注ぎます。三陸復興国立公園と早池峰国定公園を閉伊川が結び、本市は「森・川・海」の豊かな自然に恵まれているのが特徴です。市域の９割以上が森林であるため、集落は閉伊川流域とその支流（小国川・刈屋川・長沢川・近内川）域に多くが集中しています。市北部の田老地域では神田川・田老川が東に流れて太平洋に注ぎ、宮古地域では南部の津軽石で津軽石川が宮古湾に注ぎ、集落が形成されています。

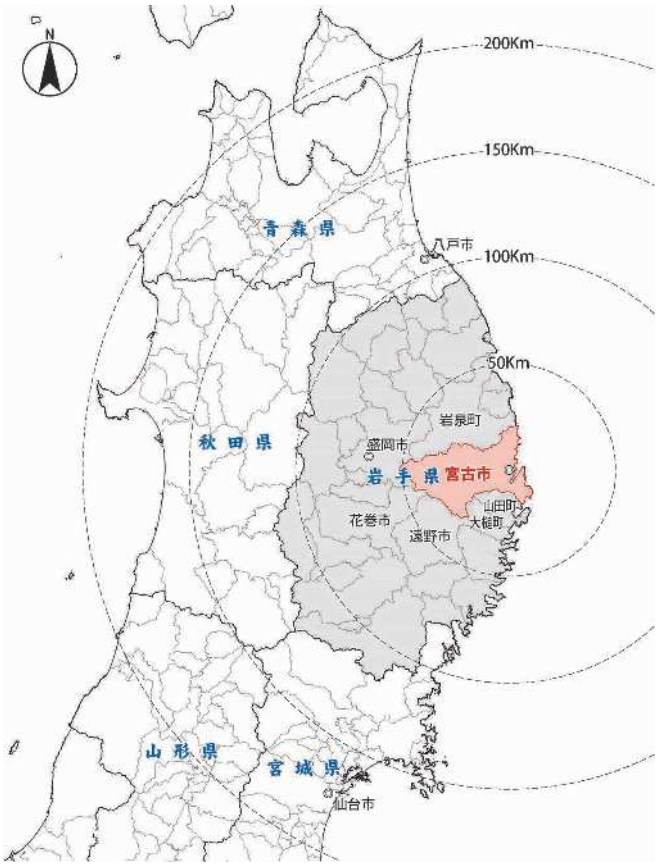


図２－１　位置図

2011（平成 23）年の東日本大震災による甚大な津波被害によって、沿岸部の集落は区画整理、高台移転、防潮堤の建設が行われ、様相が一変しました。2016（平成 28）年の台風 10 号、2019（令和元）年の台風 19 号により沿岸部のみならず内陸部も浸水被害、土砂災害に見舞われ、道路改良などの復旧・復興事業が行われました。

（２）位置と交通

本市は、岩手県沿岸部のほぼ中央に位置する県沿岸部の中核都市です。江戸との交易で栄えた宮古港、宮古代官所があった宮古町は、盛岡城下のほぼ真東に位置し、盛岡藩の主要港として発展してきました。

岩泉町
堺ノ神岳
押角峠
峠ノ神山
亀ケ森
岩泉町
サクドガ森
青松葉山
安庭山荘
源兵衛平
国道340号線
安家川
宮古市
新里地域
国道106号線
（宮古街道）
JR山田線
閉伊川
門馬
川内駅
茂市駅
JR山田線
腹帯駅
国道106号線
（宮古街道）
閉伊川
陸中川井駅
宮古市
川井地域
高桧山
早池峰山のアカエゾマツ自生南限地
鶏頭山
中岳
早池峰山
早池峰剣ヶ峰
早池峰国定公園
花巻市
小国川
国道340号線
薬師川
薬師岳
蓬平
遠野市
土坂峠
大槌町
山田町
神倉
長沢川
花輪
田鎖神社
閉伊川
雄又峠
宮古市
宮古地域
近内川
国道106号線
（宮古街道）
JR山田線
宮古駅
宮古市役所
宮古港
宮古湾
光岸地
三陸鉄道リアス線
国道45号線
（浜街道）
津軽石駅
国道45号線
（浜街道）
重茂半島
十二神山自然
十二神山
宮古市
田老地域
田老鉱山跡
沼の浜
三王団
神田川
田老川
田老防潮堤
田代川
摂待川
崎山の潮
黒森神社
蛸の浜
浄土ヶ浜
鍬ケ
閉伊川

海運が隆盛だった戦前までは、三陸汽船によって宮古港から宮城県塩釜や東京、青森県八戸や北海道函館と結ばれ、宮古港は産業と文化の玄関口でした。

主要な街道は、盛岡・宮古間の宮古街道（現在の国道 106 号）、沿岸部を南北に通る浜街道（現在の国道 45 号）、川井地域の小国から土坂峠をへて沿岸の大槌へ通じる道又・大槌街道（現在の国道 340 号）でした。宮古から雄又峠をへて田代、岩泉に至る中北通も、田老など地域の町を結ぶ往来の多い道でした。

宮古街道の盛岡・宮古間は徒歩２泊３日の行程で、盛岡から程なく北上山地の険しい山道にわけ入り、区界峠からは兜明神岳を水源とする閉伊川と並走するように街道が走っていました。繰り返し道路改修が行われ、1901（明治 34）年に閉伊川馬車が走り、1913（大正２）年に盛宮自動車会社が盛岡・宮古間で運行を開始しました。鉄道は、国鉄山田線が 1920（大正９）年に盛岡起点で着工され、1928（昭和３）年に区界駅、1933（昭和８）年に陸中川井駅まで開通し、1934（昭和９）年に宮古駅が開業しました。

戦後は、仙台・八戸間を結ぶ国道 45 号（浜街道）が 1972（昭和 47）年に全線開通し、1978（昭和 53）年には盛岡・宮古間の国道 106 号が全線開通しました。1984（昭和 59）年には、宮古駅から沿岸を南北に結ぶ三陸鉄道が全国初の第三セクターとして開通しました。また、国道 340 号によって遠野から立丸峠、川井・茂市をへて岩泉へとつながっています。

東日本大震災からの復興道路として三陸沿岸道路と宮古盛岡横断道路が整備され、路線バスで宮古－仙台間が４時間、宮古－盛岡間が１時間 30 分で結ばれました。市内路線バスは、宮古駅を起終点として、国道 45 号と国道 106 号を軸に、病院や観光地を経由しながら市内の各地域を結んでいます。

図２－３　位置と交通

（３）市内の各地域

現在の市域は、2005（平成 17）年及び 2010（平成 22）年の合併により宮古市、田老町、新里村、川井村の１市１町２村が一つになった広大な市域となっています。本計画では旧市町村の領域を示す場合、地名に「地域」をつけ、宮古地域・田老地域・新里地域・川井地域と明示します。地域の中の旧大字などの範囲を「地区」として呼称します。

（ａ）宮古地域

宮古地域（旧宮古市）は、江戸時代になって天然の良港である鍬ヶ崎浦に宮古港が開かれ、宮古湾の豊富な海産物を江戸へ商い、「南部領内随一の繁華地」といわれる港町へと発展をとげました。明治以後には港湾が埋め立て整備され、漁業基地、輸出入港となり、岩手県沿岸部の中核都市へと成長をとげました。現在も水産業が基幹産業となっています。

江戸時代に宮古代官所が置かれた本町から新町・向町、現在の中央通商店街などを中心に町が形成されました。1934（昭和９）年の宮古駅開業に合わせて商店街は西へ拡大し、末広町商店街や大通り商店街が形成されます。市役所庁舎は、明治維新後に埋立て造成された新川町にありましたが、東日本大震災後に宮古駅に隣接して建設、移転しています。現在の中心市街地は、宮古駅及び市役所本庁舎の周辺に形成されています。

（ｂ）田老地域

田老地域（旧田老町）は、太平洋に面した田老漁港を中心に町が形成されました。明治と昭和の三陸地震津波で壊滅的な被害を被ってきました。1933（昭和８）年の津波襲来後に、いち早く防潮堤の建設に取り組み、「津波防災のまち」として知られています。1936（昭和 11）年に田老鉱山が操業を開始し、人口も増加して町は賑わいました。東日本大震災による津波で町は壊滅的な被害を受けましたが、区画整理事業によって高台が整備され、集落は三王団地に移転しました。津波遺構として残された防潮堤やたろう観光ホテルをめぐる「学ぶ防災」ガイドが行われ、修学旅行や防災学習など市内外から多くの見学者が訪れています。

（ｃ）新里地域

旧宮古市の西、北上山地の東部に位置し、地域の四方を山に囲まれています。東に峠ノ神山、北に堺ノ神岳、南に蓬平など標高 1,000 m内外の山並みが続きます。閉伊川沿いに腹帯地区と茂市地区、蟇目地区の集落があり、北の押角峠から流れる刈屋川が閉伊川に合流し、刈屋地区・和井内地区があります。主な産業は農業で、自給用の米と肉用牛を中心とする畜産に、豆類・麦類・粟・稗・蕎麦の畑作物です。かつては、養蚕、薪炭が主な産業でした。代表的な観光資源としては、閉伊川のアユ、刈屋川のイワナ・ヤマメがあり、多くの釣り人が訪れています。

（ｄ）川井地域

岩手県の中央部、北上山地のほぼ中央に位置し、市の西部を占めています。旧川井村は、国内でも有数の広大な面積を有し、北上山地の主峰早池峰山をはじめ、1,000 mをこえる山々に囲まれています。区界峠で盛岡市に接し、南は立丸峠で遠野市、土坂峠で大槌町に接し、集落は閉伊川とその支流小国川や大小の沢々に形成された小規模な平坦地に形成されています。

大部分が山林に覆われ、古くから林業が主要産業でした。江戸時代には桧材・桧柾が生産され、馬で盛岡城下へ、閉伊川を木流しで宮古港へ移出されました。昭和 30 年代から日本短角牛の原種地として畜産が盛んになり、大規模な採草地と放牧地が造成されました。早池峰山は、文筆家深田久弥の『日本百名山』、田中澄江の随筆集『花の百名山』にも選定され、多くの登山愛好者が訪れています。

２　自然環境・地理的環境

（１）地形・地質

（ａ）北上山地と三陸海岸の形成

岩手県の沿岸部にある本市は、市内全域が北上山地に含まれています。北上山地は、南北には宮城県牡鹿半島から青森県八戸市までの約 250 km、東西は太平洋から北上低地帯まで約 80 kmの細長い高原状をなす山塊です。岩手県ではおよそ東半分にあたる広大な範囲を占め、地質構造上、南部北上（きたかみ）帯、根田茂（ねたも）帯、北部北上帯に分けられます。宮古市西部でそれらの３帯は接しており、宮古市のほとんどは北部北上帯に属しています。

南部北上帯は、５億年前（古生代初め）に赤道付近でできた基盤が浅い海の堆積物を載せながらプレートの運動によって北に移動し、１億４千万年前（中生代白亜紀）にユーラシア大陸に衝突、付加（ふか）しました。根田茂帯は、北へ移動する南部北上帯の前面に付加して変成されたものとされています。

北部北上帯の基盤は、３億年以上前から１億５千万年前（古生代後期から中生代ジュラ紀）にかけて堆積した泥岩やチャートなどの深海堆積物を主体とし、１億８千万年前から１億４千万年前（中生代ジュラ紀～白亜紀初め）にかけてプレートの沈み込みによりユーラシア大陸に付加して形成されました。３帯が衝突・付加した後、１億３千万年前から２千万年前（中生代白亜紀前期）に、大規模に花崗岩

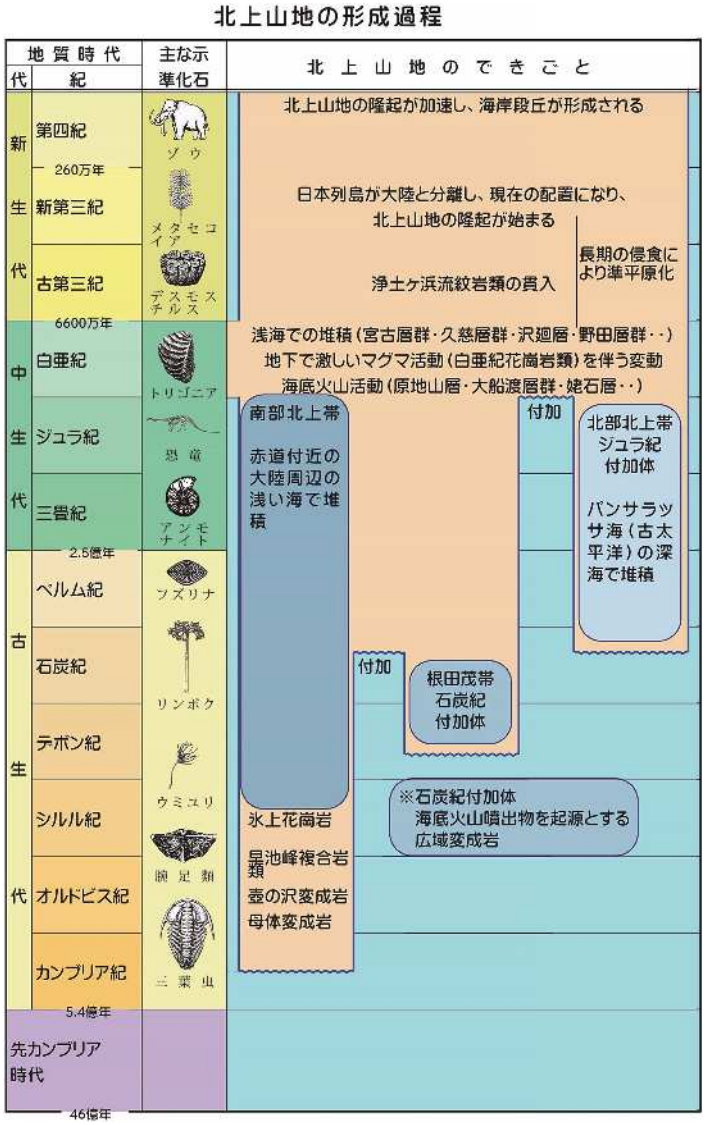


図２－４　北上山地の形成過程

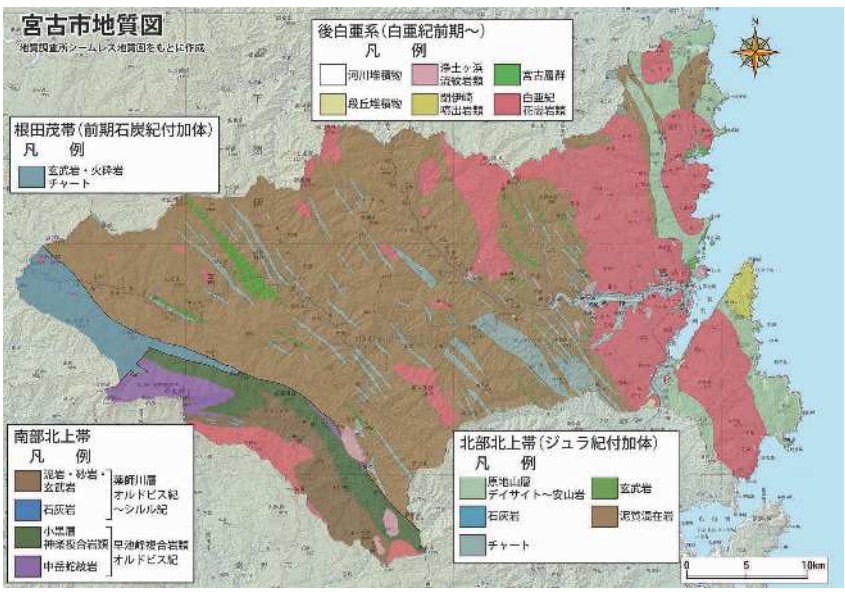


図２－５　地質図

質マグマが活動し、地下深くに宮古花崗岩などの深成岩体が形成されました。

中生代白亜紀以降、北上山地は陸地となり徐々に平坦化しましたが、その間に北部北上帯の一部は沈降して浅海をつくりました。このような浅海で１億１千万年前（中生代白亜紀前期）に宮古層群、白亜紀後期に久慈層群など、新生代古第三紀に野田層群などが堆積します。また、今から４千５百万年前（新生代古第三紀）に、小規模な酸性マグマが貫入し、浄土ヶ浜流紋岩類などの宮古市から岩泉町にかけて点在する流紋岩体が形成されました。

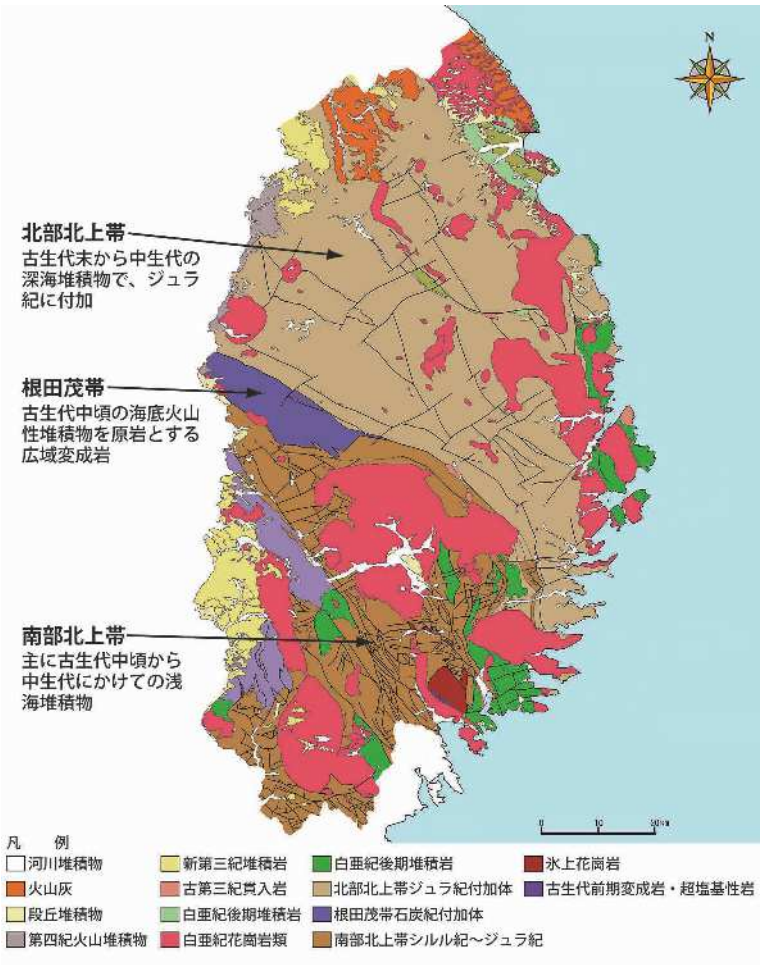


図２−６　北上山地の地質構造区分

（ｂ）リアス海岸

日本列島は、今から２千万年前（新生代新第三紀）にユーラシア大陸から分離し、１千５百万年前に現在の形になりました。その後は、太平洋プレートにより東西方向に圧縮されて、南北に軸をもつ褶曲（しゅうきょく）構造が発達しました。北上山地は隆起域にあたり、重茂半島が東に突き出たアーチ状の海岸線をもつ、南北に細長い紡錘形の山塊がつくられました。隆起の大きな部分が、南北に連なって分水嶺（ぶんすいれい）をつくりました。その分水嶺の位置により、宮古市を流れる閉伊川が、北上山地で最も長い河川となっています。

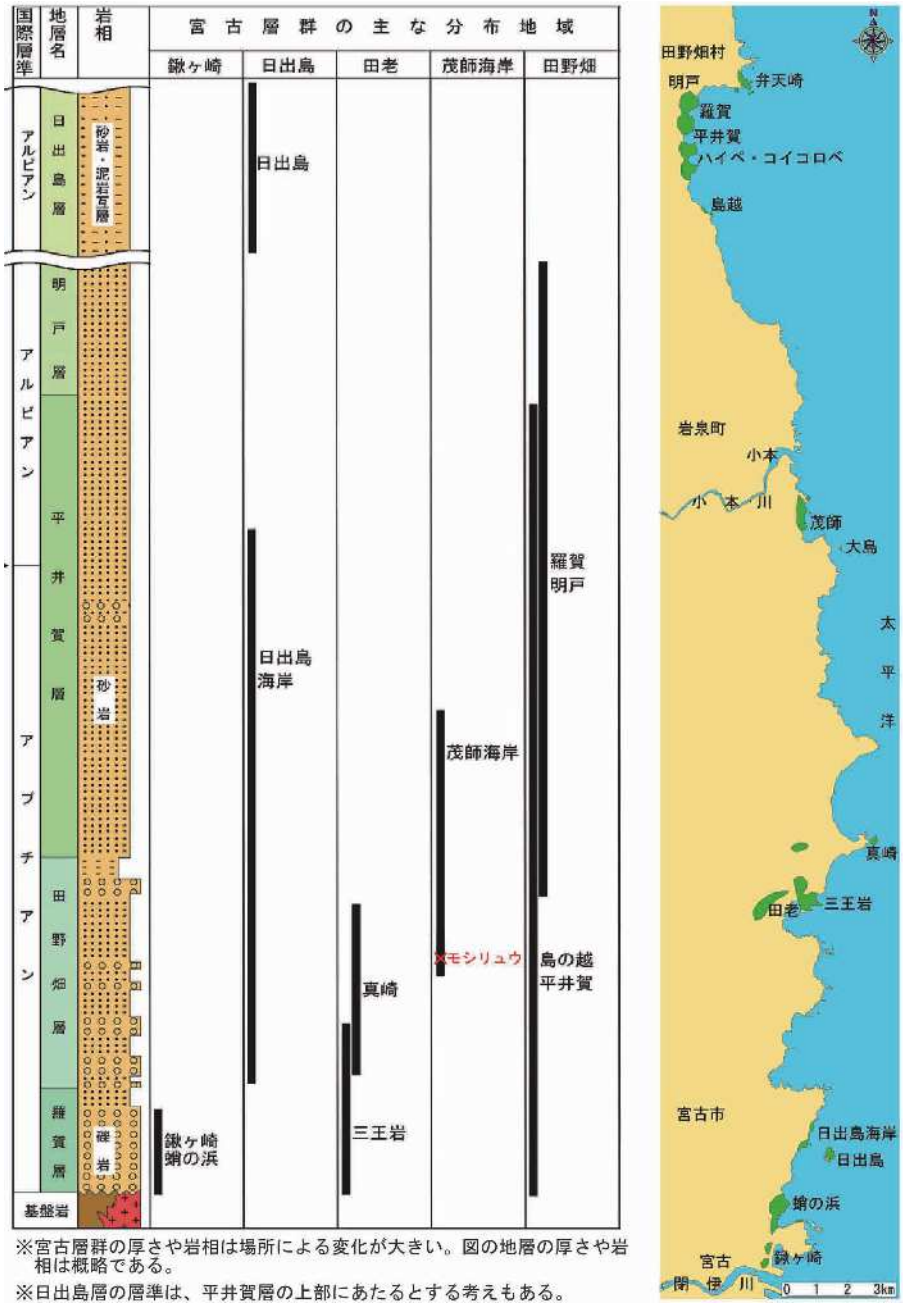
北上山地の隆起速度は、今から 80 万年前にさらに加速したとされます。また、260 万年前（新生代第四紀初頭）から氷河期が始まり、海面も大きく変動するようになりました。北上山地の隆起加速と海面変動とが連動して、三陸海岸では大規模な海岸段丘が形成されました。

三陸海岸は宮古湾を境界に大きく変化し、北部は切り立った断崖が直線的に続き、南部は入江が深く入り込んだリアス海岸になっています。三陸海岸は北部から南部にかけて海岸段丘が連続しており、北上山地全体では隆起が続いていることを示しています。北上山地では、地層や断層、花崗岩類が北北西から南南東の方向に配列し、宮古市以北の三陸海岸では海岸線の方向はその配列方向と一致しています。このために、北部の海岸では侵食に強い岩石が直線的に続く断崖を形成しました。一方、南部の海岸では海岸線の方向とその配列方向は斜交しています。南部では河川の流路が短く、海岸線の方向に対して斜めに並んでいます。南部の海岸では岩石が雁行（がんこう）状に配列しているため、侵食に強く海に突き出した岬と、河川の侵食によって形成された湾が入り組んだリアス海岸となっています。

（ｃ）宮古層群

宮古層群は宮古市鍬ヶ崎の出崎を南端、田野畑村弁天崎を北端とする南北約 35 kmの海岸線にみられます。本市の主な分布地域は、南から順に鍬ヶ崎出崎、蛸の浜、日出島海岸および日出島、田老町内および三王岩、真崎、摂待大島です。さらに北へ、岩泉町茂師、田野畑村コイコロベ海岸、ハイペ海岸、島の越、平井賀、羅賀、明戸、弁天崎と分布しています。

地層は下位から順に、羅賀層、田野畑層、平井賀層、明戸層、日出島層からなっています。宮古層群は三陸復興国立公園内に位置し、崎山の潮吹穴と蝋燭岩が国の天然記念物に、三王岩が岩手県の天然記念物に、摂待大島が市の天然記念物に指定されています。宮古層群では多様な化石が確認されており、外洋に面した沿岸から浅海の環境であったことがわかります。その生物群集は宮古動物群と呼ばれ、サンゴやアンモナイト、二枚貝などが確認されています。



※宮古層群の厚さや岩相は場所による変化が大きい。図の地層の厚さや岩相は概略である。
※日出島層の層準は、平井賀層の上部にあたるとする考えもある。

図２−７　宮古層群分布図

（ｄ）三陸ジオパーク

三陸ジオパークは、地球活動の歴史と震災の記憶を後世に伝える学習フィールドとして、2013（平成25）年９月24日に日本ジオパークに認定されました。本市は、青森県八戸市から宮城県気仙沼市までの三陸ジオパークの中央に位置し、三陸ジオパーク推進協議会（事務局：岩手県環境生活部環境生活企画室ジオパーク推進担当）及び宮古市三陸ジオパーク推進協議会（事務局:宮古市産業振興部観光課）が中心となり、サイトの保護・教育・研究・観光客誘致など様々な事業に取り組んでいます。現在、地質学的特徴や地域の歴史文化を示すサイトが設定され、見学会などが行われています。

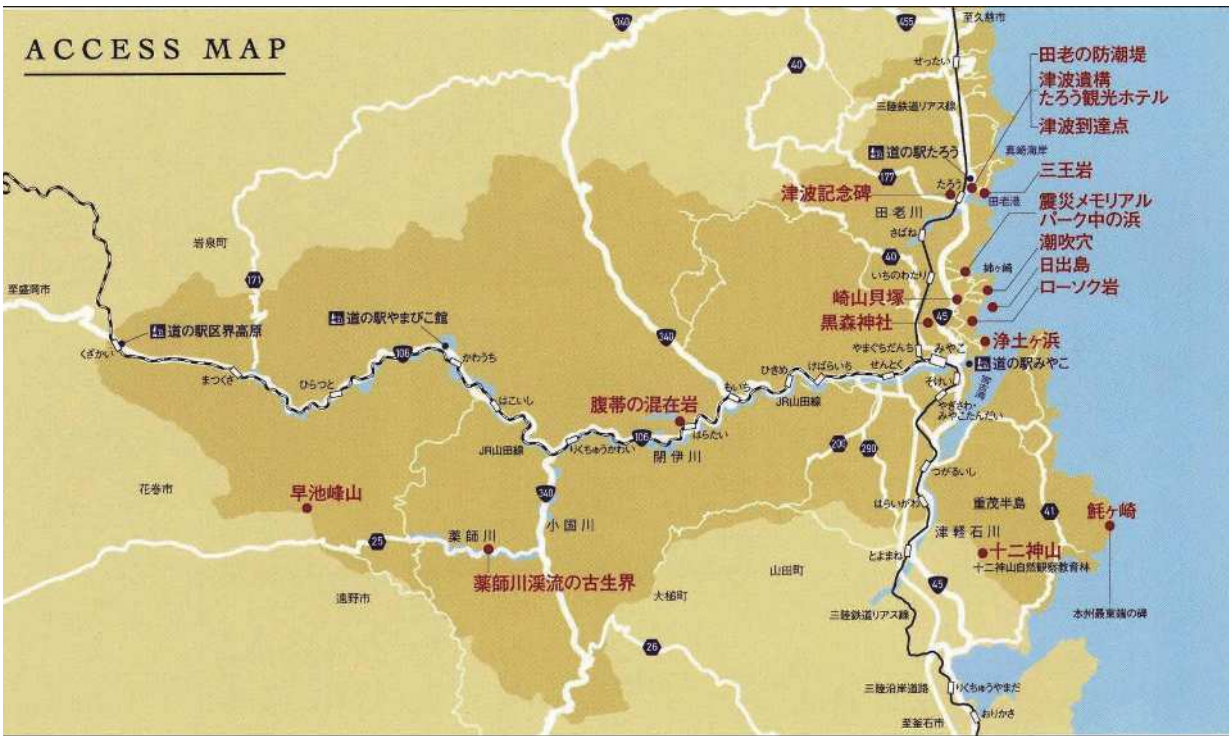


図２－８　市内の三陸ジオパーク・サイトマップ（提供：市観光課）

（２）気象

岩手県は、1945（昭和20）年１月26日に薮川（やぶかわ）で－35.0℃を記録するなど、冬季の最低気温の報道で常に上位を占めていることから、本州で一番寒いと言われています。薮川と並んで岩手県内１・２の寒さを競うのが本市の区界であり、1945（昭和20）年の同日に門馬（かどま）で－31.5℃を記録しています。

近年では、2021（令和３）年１月９日朝の最低気温が、区界で－24.1℃を記録しました。一方で、気象観測所のある宮古地区は、太平洋・宮古湾に臨み、海洋の影響で一年を通して寒暖の差が小さい地域です。

表２－１　気象の極値　（令和４年12月31日現在）

区　　分	極　値	記録年月日	観測所名
最高気温	37.5℃	平成19年８月13日	川井地域気象観測所
最低気温	-25.2℃	昭和53年２月15日	門馬地域気象観測所
最大風速	31.4m/s	大正元年９月23日	宮古特別地域気象観測所

最大瞬間風速	43.5 m/s	平成14年10月２日	宮古特別地域気象観測所
最大１時間降水量	86.5 mm	平成25年７月15日	区界地域気象観測所
日降水量	319.0 mm	平成12年７月８日	宮古特別地域気象観測所
月最深積雪	138 cm	平成30年２月14日	区界地域気象観測所

（『宮古市の統計』令和４年度版より）

（ａ）北上山地の気候

北上山地は南北に連なる海抜高度の高い広大な地域です。岩手県内陸部と沿岸部の気候の境界となっています。川井から門馬までの川井地域は高原の気候です。山間地で夏の暑さと冬の寒さの差が激しく、昼と夜の気温差も大きい地域です。11月初めに初雪が降り、１月半ばから２月にかけての厳寒期には、最低気温マイナス20℃前後は珍しくありません。積雪は平均30㎝前後で、１m以上になることはあまりありません。

表２－２　無霜期間

	終霜	初霜	初終間の日数
盛　岡	5/ 8	10/16	160
門　馬	5/19	10/ 3	136
川　井	5/10	10/20	162
宮　古	5/ 1	10/27	178

工藤敏雄1985『岩手のお天気』より

四季の気候

北上山地の春を特徴づけるのは、晩霜（遅霜）と異常乾燥です。晩霜は、大陸北方から移動性高気圧が乾燥と低温をもたらすことにより生じ、晩霜が頻発するのは５月中旬以降です。

北上山地は高原的な地形のため、梅雨明けと共に気温が上昇することはありません。夏は、一年中で最も風の吹かない穏やかな時期に当たります。しかし、暑さは８月15日前後を境に急激に衰え、涼しさが日増しに加わってきます。

秋は、前半はまだ晴れの日も多くなります。紅葉は10月10日前後が最盛期で、紅葉期間が比較的長いのはこの地域の特徴でもあります。

冬は、西高東低の冬型の気圧配置に伴う北西季節風が、奥羽山脈を越え北上川流域に雪を降らせながら、北上山地の西斜面を上昇します。このため、北上山地に降らせる降雪量は少なくなります。北西季節風が北上山地にぶつかり、乾燥した気流が上昇することで急激に温度が下がります。晴天時には放射冷却作用により、厳しい寒さとなります。いわゆる「しばれ」の厳しい地域です。門馬は峡谷に位置するため、積雪は北上山地の中では最も多くなります。

（ｂ）沿岸地域の気候

沿岸地域は、内陸平野部よりも冬に高温で、夏に低温です。冬季間の降水量が少なく、全体的に気温の年較差が小さく温暖な気候です。三陸沖は親潮寒流が流れており、梅雨の時期を中心として海霧が侵入する「やませ」が発生するので、沿岸地域は内陸よりも低温となります。10月頃から冬を中心として、春の半ば頃まで晴天が多くなります。

四季の気候

２月下旬から３月にかけての早春は、冬型の気圧配置が緩み、気温は徐々に上昇しますが、朝晩の気温は氷点下になることがあります。山沿いにはまだ残雪があり、冬の季節感が残っています。４月から５月は、移動性高気圧が次々に去来し、いわゆる三寒四温の変わりやすい天気が多い時期となります。

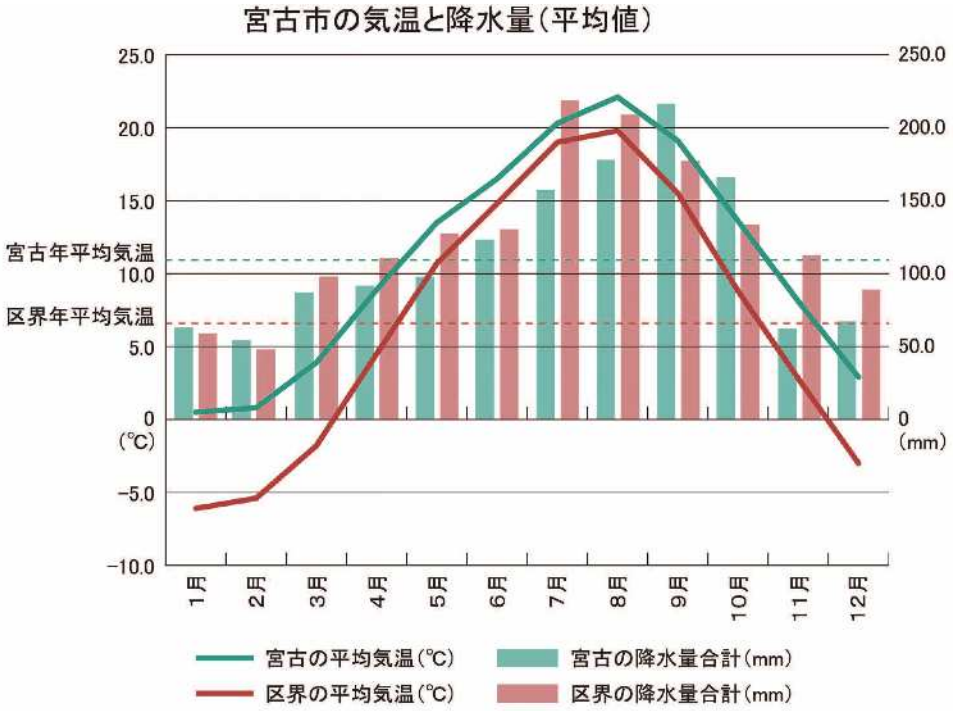
春の初めには南西風が強まり、フェーン現象を起こしやすく、空気も非常に乾燥します。

６月、梅雨前の初夏には、高気圧が強く晴天が続きます。最高気温が25～35℃に達し、真夏を思わせ

ることもあります。梅雨に入ると、梅雨前線が居座り曇天や雨天が続き、気温の上昇は緩慢となります。最後に梅雨前線が北上し、小笠原高気圧の影響を受ける盛夏となります。夏には「やませ」がふくことが多くなり、海風が入ると気温が下降します。

９月は秋雨前線と台風の影響により、曇りや雨天が多くなります。特に９月の降水量は年間を通じて最も多くなっています。秋の後半は、大陸高気圧の圏内に入り、秋晴れの日が多くなります。

真冬の１・２月は安定した冬型の気圧配置となり、沿岸地方では晴れ上がった乾燥した日が続きます。北上山地の東側にある沿岸地方の特徴は、冬の晴天であり乾燥しきった気候となります。気温は１月下旬から２月上旬にかけて最低となり、月平均気温は、盛岡より宮古の方が２～３℃高くなり、沿岸の方が海洋の影響で、気温の変化は温和です。特に２月中旬から３月上旬にかけて低気圧により降雪があります。



宮古市の平均気温

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
宮古の平均気温(℃)	0.5	0.8	3.9	8.9	13.5	16.5	20.3	22.1	19.1	13.6	8.1	2.9	10.8
区界の平均気温(℃)	−6.1	−5.4	−1.8	4.5	10.7	14.8	19.0	19.8	15.5	8.8	2.8	−3.0	6.6

宮古市の平均降水量

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
宮古の降水量合計(mm)	63.4	54.7	87.5	91.9	98.1	123.4	157.5	177.9	216.4	166.1	62.8	67.6	1370.9
区界の降水量合計(mm)	59.3	48.6	98.2	111.1	127.6	130.7	218.7	208.8	177.3	133.5	112.9	89.4	1517.7

宮古の統計期間：1991～2020年(30年)　区界の統計期間：1993～2020年(28年)
出典：気象庁HP 過去の気象データ検索より

図２－９　気温と降水量（平均値）

やませ

沿岸地域特有の気象現象に「やませ」があります。これは親潮寒流に冷やされ、水蒸気を含んだ冷湿なオホーツク海高気圧が、北東の風となって吹きつけ、低温と濃霧をもたらす現象です。昔から冷害の原因となり、飢饉を起こしてきました。

フェーン現象

春の好天時に南風が卓越する場合に、山越えした上空の風が地上付近に降りてきて乾燥した高温（フェーン現象）となり、空気も非常に乾燥します。本市を含む岩手県沿岸部では、山火事への警戒が防災無線などで繰り返し伝えられます。

（３）生態系

宮古市は温度気候的には冷温帯域ですが、同緯度の盛岡市などと比較すると、太平洋の影響を受けて、特に冬季は温暖な気候になっています。そのため植物相でも、モミ、ヤブツバキ、イヌブナなど、温帯系の植物の境界地域です。モミは、黒森神社境内に樹齢数百年に及ぶ大木が生育し、重茂半島閉伊崎にも小集団が見られ、宮古はモミの太平洋における北限分布地とされています。

イヌブナは、本州・四国・九州に分布し、岩手県内では中部以南の海岸地方及び低山地に見られます。田鎖神社の社叢（しゃそう）は、海抜 70 ～ 80 mほどの丘陵の頂部が神社境内であるために、イヌブナ・ブナ林が伐採を免れてきたものです。宮古地域の丘陵地帯の往古の自然の姿をとどめるものであり、「田鎖神社のブナ・イヌブナ林」として県の天然記念物に指定されています。

（ａ）早池峰山麓

北上山地の最高峰早池峰山（1, 917 m）は、北上山地のほぼ中央部に位置し、宮古市、花巻市、遠野市の３市にまたがっています。西から鶏頭山（1, 445 m）、中岳（1, 679 m）、早池峰山、早池峰剣が峰（1, 827 m）と 1, 000 mから 1, 900 mの山稜が続いています。地質的には山頂付近に蛇紋岩が露出しているのが特徴であり、早池峰山は高山植物の宝庫として知られています。北面には、氷河期の生き残りと考えられる本州唯一のアカエゾマツ自生地があります。

ハヤチネウスユキソウ

早池峰山の北側・東側斜面、薬師岳の北面、青松葉山、サクドガ森などには極相林が発達しています。ブナ、ヒノキアスナロ、アオモリトドマツなどを代表種とする薄暗い森林は、チシマザサなどで被われる場合もあります。また、ブナ、ミズナラ林に続くヒノキアスナロの鬱蒼（うっそう）と茂る森林のように、各種の羊歯（しだ）類が、特に沢沿いを中心に生育しています。さらに早池峰山では、その上層部でハイマツ、コメツガ、アオモリトドマツを主とする亜高山性から高山性針葉樹林帯となります。

早池峰山周辺の希少種及び貴重な自然環境

①国指定特別天然記念物「早池峰山及び薬師岳の高山帯・森林植物群落」
　ハヤチネウスユキソウ、ナンブトラノオ、ナンブトウウチソウ、ヒメコザクラ、ミヤマヤマブキショウマ等
②国指定天然記念物「早池峰山のアカエゾマツ自生南限地」
③ヒノキアスナロ群落
④早池峰山・高桧山周辺のイチイ巨木群

（ｂ）重茂半島

重茂半島の最高峰十二神山（じゅうにしんざん）（731 m）、鮭山周辺には貴重な原生林や自然林が残されています。これらを除いた半島の大部分は、すでにコナラ二次林やアカマツ、スギの造林地に変わっています。十二神山山頂から重茂川沿いの海抜 200 m内外の森林は、大部分が表日本型のブナ林であるブナ－スズタケ群落

によっておおわれています。谷沿いにはサワグルミ林（サワグルミ－ジュウモンジシダ群落）がよく発達しています。三陸中部の海岸に近い山上から谷合にかけて、ブナ原生林の植生がよく残されています。

十二神山の希少種及び貴重な自然環境

【哺乳類】クロホオヒゲコウモリ、モリアブラコウモリ、ヤマコウモリ、ニッコウムササビ、ホンシュウモモンガ、ホンシュウトガリネズミ、カワネズミ、ヒメネズミ

【鳥　類】オオルリ、センダイムシクイ、ヒガラ、シジュウカラ、エナガ、キツツキ類、ヤマセミ、十二神山の東斜面一帯：オオワシ、オジロワシの休息地（冬期）

【両生類】タゴガエル、キタオウシュウサンショウウオ

【昆虫類】トワダカワゲラ、ヒゲナガゴマフカミキリ、ルリボシカミキリ、フタスジチョウ、ムモンアカシジミ

（ｃ）閉伊川流域

森林：二次林

森林のほとんどを占める二次林の中で代表的な樹種は、高地ではダケカンバ、ミズナラ等です。低地では、アカマツ、クリ、コナラ、シラカバ等です。区界から門馬、川内、茂市方面へと高原状をなして連なる山林地帯、小国川・薬師川沿いに見られる山林地帯、花輪・宮古地方の低山地の大半がこれに相当します。カラマツ、アカマツ、スギ、コバノヤマハンノキ等が植林されています。

岩質荒原

閉伊川本流及び支流沿いには、粘板岩・砂岩・チャートなどからなる露岩地帯が点在し、特殊な植生が形成されています。その代表的な岩質荒原は、小国、川井、腹帯、茂市、神倉に見られます。ハコネシダ、ヤマスカシユリ等が岩の割れ目などを好んで生育しています。

閉伊川本流の水生生物

・陸中沿岸部は北上山地が海岸部にせまる地形であり、河川河口部からまもなく山間の渓流の形態となっています。
　アユ、ウグイ、オイカワ、ギンブナ、コイ、ヤマメ（サクラマス）、カジカ、チチブ、ヨシノボリ、ミミズハゼ、スナヤツメ
・閉伊川と各支流では、イワナとヤマメの占める割合が多いのが特徴です。
・内水面漁業では、津軽石川のサケ漁が有名ですが、近年は不漁の記録を更新し続けています。

（ｄ）海岸

光岸地（こうがんじ）から浄土ヶ浜・蛸の浜にかけては海岸断崖が発達し、アカマツ、コナラ、カシワなどを主とする二次林で被われています。海風を強く受ける岩上では、ハマハイビャクシン、ラセイタソウ、ハマギク、コハマギク、スカシユリ、アオノイワレンゲ、アオツヅラフジ、センニンソウ等の海岸特有の植物が見られます。海岸の砂浜では、ハマヒルガオ、ハマニガナ、オカヒジキ、コウボウムギ、ウンラン、オニジバ、ホソバアカザ、ハマエンドウ、ハマギク、コハマギク等が生息しています。

（ｅ）希少な昆虫：チョウセンアカシジミとセダカオサムシ

チョウセンアカシジミは、岩手県、山形県、新潟県の一部に分布している希少なチョウです。２万年前の氷河期に大陸と陸続きになった日本列島に移動し、その後、海に隔てられて、列島に取り残されました。宮古市では田代川、神田川、摂待川流域に生息し、岩手県では雫石町、田野畑村、普代村の限られた地域に生息しています。環境省のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類とされ、本

市では旧田老町が 1984（昭和 59）年、旧宮古市が 1986（昭和 61）年に天然記念物に指定しています。

本市と岩泉町の分水嶺、峠ノ神山（標高 1,229 m）のすそ野に広がる源兵衛平（げんべいだいら）は、動植物の宝庫として知られています。セダカオサムシは、北海道には広く生息していますが、本州では唯一、源兵衛平に生息することが確認されています。全長 12 ㎜ほどの世界最小のオサムシで、１千万年前に北海道と本州が切り離された時の生き残りとされています。源兵衛平のセダカオサムシは、北海道のものとは違いが認められ、亜種としてイワテセダカオサムシと名づけられ、岩手県の絶滅危惧種として保護されています。

（４）自然環境の保全と活用

本市には、『自然公園法』に基づいて環境大臣が指定する「三陸復興国立公園」と「早池峰国定公園」があり、豊かで美しい自然に恵まれています。このほか、林野庁が国有林の豊かな自然を活用するため整備するレクリエーションの森に重茂地区の「十二神山自然観察教育林」があります。ブナを主体とする天然広葉樹林が広がり「森の巨人たち百選」に選ばれ、「重茂の大ケヤキ」が有名でした（2016（平成 28）年８月 30 日に上陸した台風 10 号により倒伏）。

原生の状態や優れた自然環境を維持している地域として、『自然環境保全法』により「早池峰自然環境保全地域：特別区」が指定され、『岩手県自然環境保全条例』により「区界高原自然環境保全地域」、「青松葉山自然環境保全地域」が指定されています。また、黒森神社を中心とする「黒森山環境緑地保全地域」が、歴史的遺構を含む良好な自然環境として同県条例により指定されています。

市（環境課）では、樹木・草花や鳥類の観察を通して自然の尊さ、自然保護や環境保全の大切さを学ぶ機会として、自然観察会を毎年２回行っています。

表２－３　自然観察会の実施場所

自然観察会の場所	地　区
摂待川下流周辺	摂　待
田老鉱山・沼の浜	田　老
亀ヶ森の一本桜	田　代
黒森神社周辺、黒森山	山　口
十二神自然観察教育林	重　茂
源兵衛平	刈　屋
安庭山荘周辺	和井内
高檜山周辺	門　馬
区界高原周辺	門　馬

源兵衛平で行われた自然観察会

3 社会的環境

（1）沿革

本市には488箇所もの縄文遺跡が河川流域や海岸段丘上に分布し、豊かな自然の恵みを生かして生活が営まれてきました。中世には、鎌倉幕府の地頭として閉伊氏が領地し、家門は栄えて閉伊四十八郷とも言われました。江戸時代には盛岡藩領となり、閉伊郡の多くが宮古通代官所の管轄となりました。市の南西部を流れる小国川沿いの江繋から南が大槌通代官所、大峠を境に平津戸から西が上田通代官所の管轄でした。

1797（寛政９）年にまとめられた『邦内郷村志』には、宮古通全体で57の村が所属し、1780（安永９）年の戸数は5,403戸と記されています。現在の市域では、宮古通に40村・上田通３村、大槌通３村となっていました。

1872（明治５）年に岩手県となり、1886（明治19）年には田老村外３箇村、宮古村外11箇村・津軽石村外５箇村・田鎖村外５箇村・茂市村外４箇村・川井村外６箇村・門馬村外２箇村・小国村外１箇村の８つの戸長役場が置かれ、行政単位となりました。1889（明治22）年の町村制施行により、15箇村となり、1924（大正13）年には、宮古町と鍬ヶ崎町が合併して宮古町となります。1941（昭和16）年には、宮古町・山口村・千徳村・磯鶏（そけい）村が合併し、宮古市となりました。1944（昭和19）年には、田老村が田老町となります。1955（昭和30）年「昭和の大合併」（町村合併促進法施行：1953（昭和28）年10月１日）で、崎山村・津軽石村・重茂村・花輪村が宮古市に編入されました。また、茂市村と刈屋村が合併して新里村となり、川井村と門馬村・小国村の３村が合併して川井村が誕生しました。2005（平成17）年６月には、宮古市と田老町・新里村が合併して新制宮古市となりました。2010（平成22）年１月に宮古市と川井村が編入合併し、現在に至っています。

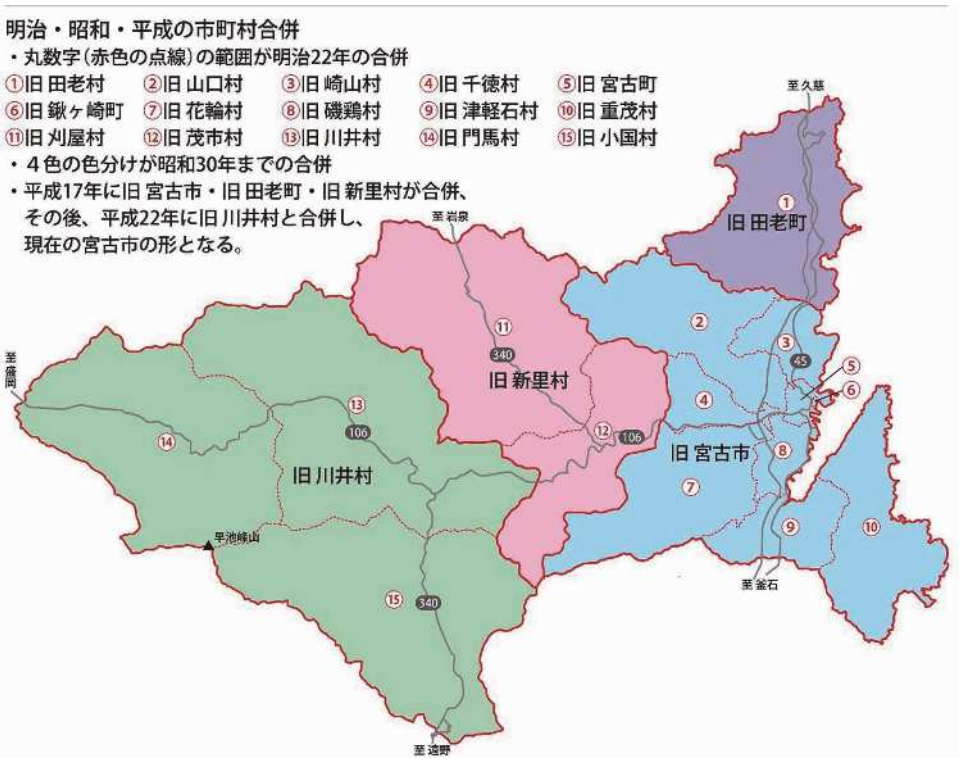


図２-10　市町村合併の変遷

第1章
第2章
第3章
第4章
第5章
第6章
第7章
第8章
第9章
第10章
第11章

表２－４　市町村合併の変遷

西暦	1797	1886	1889	1924	1941	1944	1955	2005	2010
年号	寛政9	明治19	明治22	大正13	昭和16	昭和19	昭和30	平成17	平成22
市町村数	46	44	15	14	11	11	4	2	1
宮古通	摂待村	摂待村	田老村	田老村	田老村	田老町	田老町	宮古市	宮古市
	乙部村	乙部村							
	田老村	**田老村**							
	末前村	末前村							
	崎山村	崎山村	崎山村	崎山村	崎山村	崎山村	宮古市		
	鍬ヶ崎村	崎鍬ヶ崎村							
		浦鍬ヶ崎村	鍬ヶ崎町	宮古町	宮古市	宮古市			
	宮古村	**宮古村**	宮古町						
	黒田村								
	山口村	山口村	山口村	山口村					
	田代村								
	近内村	近内村							
	千徳村	千徳村	千徳村	千徳村					
	根市村	根市村							
	花原市村	花原市村							
	磯鶏村	磯鶏村	磯鶏村	磯鶏村					
	八木沢村	八木沢村							
	小山田村	小山田村							
	高浜村	高浜村							
	金浜村	金浜村							
	津軽石村	**津軽石村**	津軽石村	津軽石村	津軽石村	津軽石村			
	赤前村	赤前村							
	重茂村	重茂村	重茂村	重茂村	重茂村	重茂村			
	音部村	音部村							
	松山村	松山村	花輪村	花輪村	花輪村	花輪村			
	田鎖村	**田鎖村**							
	花輪村	花輪村							
	長沢村	長沢村							
	老木村	老木村							
	蟇目村	蟇目村	茂市村	茂市村	茂市村	茂市村	新里村		
	茂市村	**茂市村**							
	腹帯村	腹帯村							
	刈屋村	刈屋村	刈屋村	刈屋村	刈屋村	刈屋村			
	和井内村	和井内村							
	古田村	古田村	川井村	川井村	川井村	川井村	川井村	川井村	
	川井村	**川井村**							
	片巣村	片巣村							
	箱石村	箱石村							
	鈴久名村	鈴久名村							
	川内村	川内村							
	夏屋村	夏屋村							
上田通	門馬村	**門馬村**	門馬村	門馬村	門馬村	門馬村			
	平津戸村	平津戸村							
	田代村	田代村							
大槌通	泉沢村	江繋村	小国村	小国村	小国村	小国村			
	江繋村								
	小国村	**小国村**							

※太字は戸長役場が設置された村を表す

（２）人口の変遷

本市の総人口は、2020（令和２）年の国勢調査人口で 50,369 人となり、2015（平成 27）年の 56,676 人と比較すると、6,307 人、11.1％減少しています。2005（平成 17）年の合併前の旧市町村単位でみると、旧宮古市は 1980（昭和 55）年をピークに人口が減少に転じ、旧田老町、旧新里村、旧川井村は 1955（昭和 30）年代から人口減少が続いています。減少の特性は、少子化、転出者の増加によるものでした。

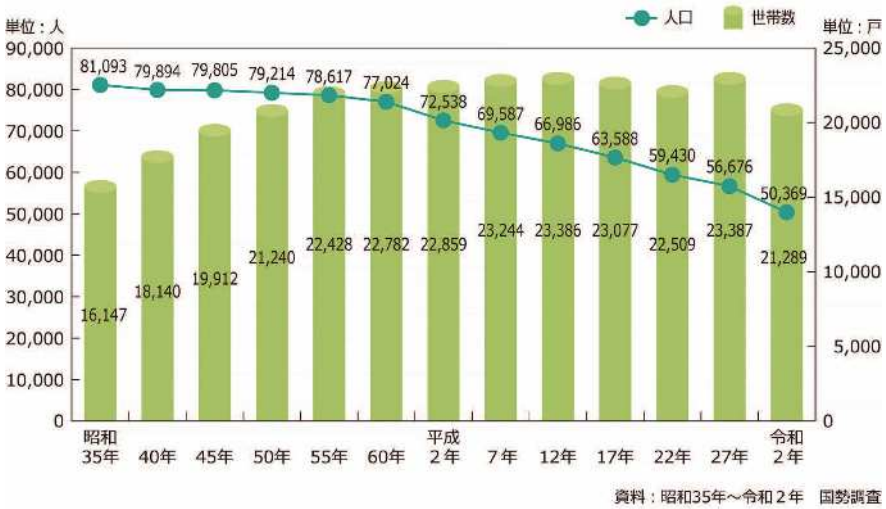


図２-11　人口・世帯数の推移

農山村の過疎化が進む中で、旧新里村と旧川井村が 1970（昭和 45）年、旧田老町が 1976（昭和 51）年、新宮古市が 2005（平成 17）年に過疎地域に指定されています。現在も少子高齢化が急速に進行しており、2045（令和 27）年には、市民のおよそ 2.2 人に１人が 65 歳以上の高齢者になるものと見込まれます。総人口の減少が進み、2050（令和 32）年には 2015（平成 27）年に比べて 53％減少し、２万７千人程度になるものと見込まれています。（第１章「図１－１　人口の推移と今後の推計」参照）

住民基本台帳による本市の総人口は、2024（令和６）年４月１日現在で 46,331 人です。

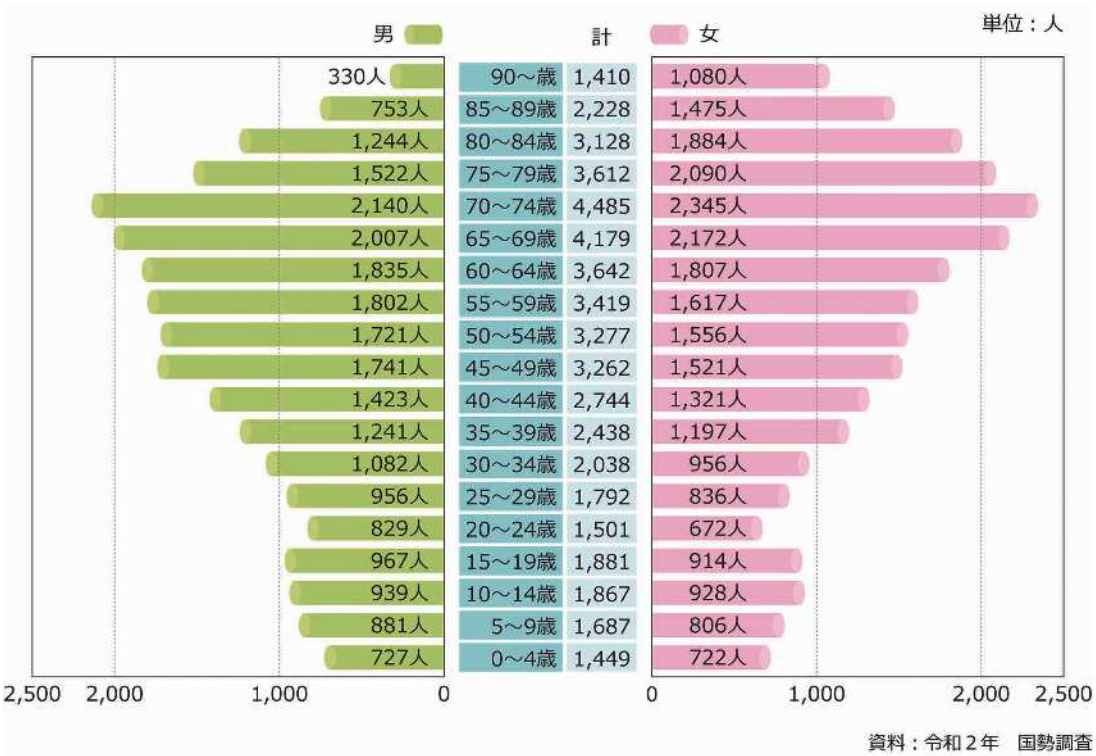


図２-12　５歳階級別人口

（３）産業

風土を生かした農業や豊かな森林資源を生かした林業、つくり育てる漁業を推進する水産業、自然景観、体験観光を核とした観光など、地域の特性を生かした産業が発展してきました。近年、産業の多様化に伴い、本市の産業を取り巻く環境は変わってきており、整備が進む都市間道路交通網を生かした物流や交流人口の拡大を図る新たな展開が期待されています。

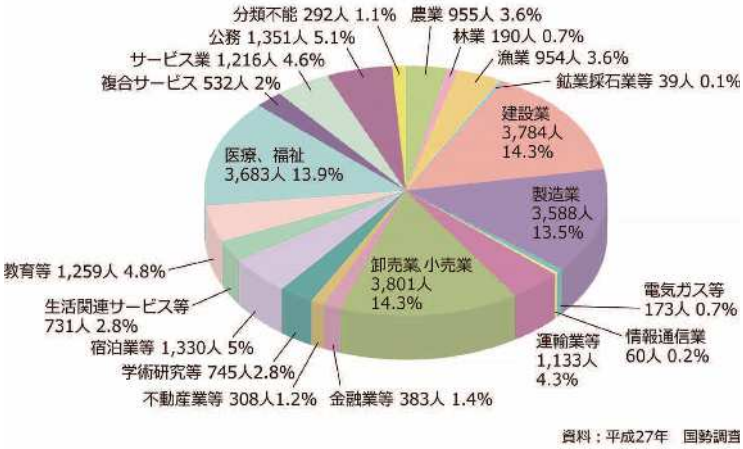


図２-13　産業別（大分類）15歳以上就業者

（ａ）農業

本市は北上山地に位置し、河川流域に集落が集中しています。農業は、その地形的な要因から農家１戸あたりの耕作面積が少なく、水稲、野菜、果樹、花き、畜産などを組み合わせた複合経営と多品目栽培が特徴です。こうした地域特性を生かし、産地直売施設向けに少量多品目の野菜生産が増えています。（『農業経営基盤の強化の促進に関する基本的な構想』2022 年　宮古市）

また、中山間地域・山間地域では、水稲の作付けが中心ですが、葉菜・果菜類などの園芸作物や肉用牛などの畜産も盛んです。

表２-５　主な農産物の作付面積　　単位：ha

	平成22年度	平成27年度	令和２年度
稲	16,205	11,759	—
いも類	404	312	374
豆類	1,540	717	615
雑穀	346	196	880
野菜類	9,351	7,013	6,757

資料：農林業センサス

注）令和２年調査から集計方法が変更されたため、農業経営体総数の値を掲載している。

（ｂ）林業

森林が市域の 91.8％を占める本市は、森林面積が 115,600ha で岩手県内第１位の森林面積です。森林面積の 28.5％が国有林、71.5％が民有林となっています。本市の民有林の主な樹種と面積は、針葉樹が 34.9％、広葉樹が 61.3％です。広葉樹の中では、ナラ類が最も多くなっています。

表２-６　森林面積と森林率　　単位：面積ha、森林率%

区分	面積	森林面積			森林率
			国有林	民有林	
平成30年度	125,915	115,600	32,998	82,603	91.8

資料：岩手県林業の指標

注）単位未満を四捨五入しているため、各数値の積み上げと総数は一致しない

表２-７　民有林の状況

区　分	人工林			天然林		
	計	針葉樹	広葉樹	計	針葉樹	広葉樹
民有林面積（ha）	27,400	26,989	411	52,010	1,805	50,205
民有林森林蓄積（㎥）	7,916,643	7,861,732	54,911	8,623,498	593,637	8,029,861

資料：岩手県林業の指標

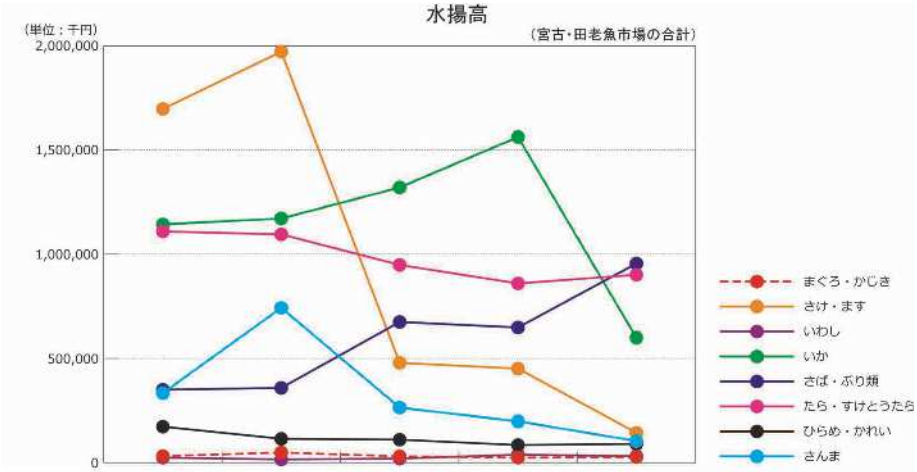
明治以後、北上山地の豊富な森林資源は用材木として伐採され、閉伊川とその支流を利用して宮古湾に集積されました。宮古町には木材輸出業者や製材業者が活躍し、スギ・マツ・キリ材、枕木等が、宮古港から出荷されました。こうして木材として伐採された後には、カラマツや杉が植林され、人工林では針葉樹が 99.3％を占めています。

全国有数の木炭生産県で「岩手木炭」と称された木炭生産は、国鉄山田線の開通とともに昭和初期から、川井地域と新里地域を中心に急速に生産を伸ばしました。やがて、石油やガスの普及によって家庭用木炭の需要が激減し、旧川井村では 1953（昭和 28）年をピークに生産量は減少していきました。

（c）水産業

三陸沖は、黒潮（日本海流）と親潮（千島海流）のほかに、津軽海峡を東流してくる対馬海流の分岐流の、三海流が交錯しています。このため、回遊性の魚類が豊富に集まり、世界三大漁場とも称されてきました。三陸沖には、夏は黒潮に乗って北上してくるイワシ、カツオ、マグロなどが集まります。親潮の勢力が強い冬には、サンマ、イカ、タラ、サケ、マスなどが移動してきます。沿岸の大部分は岩礁のため、コンブやワカメなどの藻類やアワビ、ウニなど磯根（いそね）資源が豊富です。

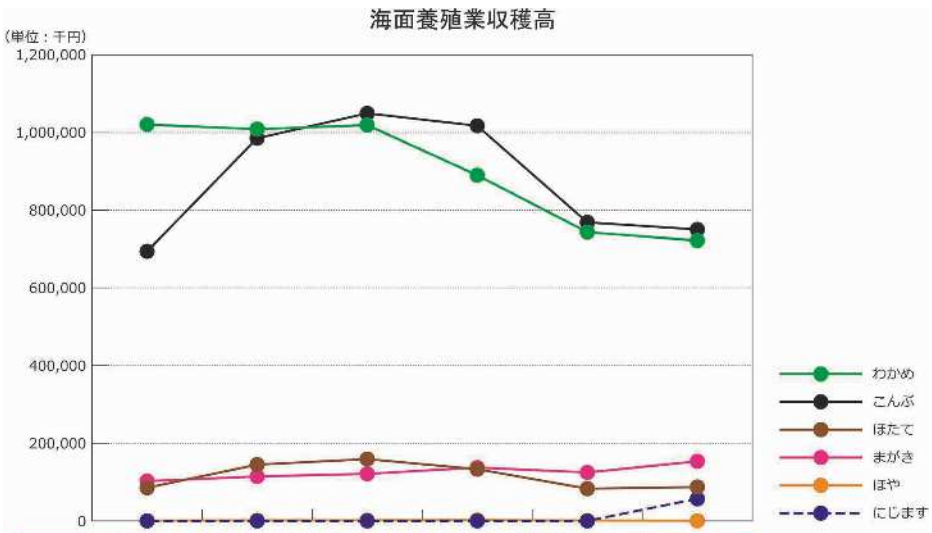
三陸海岸の漁業資源に恵まれ、江戸時代には江戸との交易が盛んとなり、水産業は本市の基幹産業を担ってきました。1905（明治 38）年には、全国でもいち早く鮭の人工ふ化が始まりました。戦後のカツオ巻網（まきあみ）漁法やサンマ棒受網漁法の発明によって、水揚げ量は飛躍的に増大しました。1955（昭和 30）年頃の宮古港は、サンマ棒受網と北洋鮭マス漁業の根拠地として全国に知られました。昭和 40 年代からワカメ、コンブ、ノリ、カキについで、ホタテ貝の養殖が盛



	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
まぐろ・かじき	31,472	48,895	30,315	24,446	27,115
さけ・ます	1,697,276	1,971,988	479,124	451,500	143,485
いわし	24,490	15,628	19,856	38,568	31,399
いか	1,143,430	1,171,502	1,320,537	1,562,666	599,462
さば・ぶり類	350,206	358,743	675,205	648,773	955,552
たら・すけとうたら	1,109,581	1,095,550	948,902	859,903	901,862
ひらめ・かれい	172,789	114,811	110,534	84,651	90,174
さんま	334,321	743,093	264,426	198,488	104,032

資料：宮古市水産課
（単位：千円）

図２−14　水揚高（宮古・田老魚市場の合計）



	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	令和2年度	令和3年度
わかめ	1,020,753	1,008,672	1,029,277	899,926	743,655	721,642
こんぶ	694,095	985,259	1,049,456	1,017,350	768,760	750,491
ほたて	85,274	144,777	159,161	133,107	82,954	87,321
まがき	102,526	114,235	121,081	137,337	124,693	153,443
ほや	426	1,449	1,650	2,069	996	214
にじます	0	0	0	0	0	56,905

資料：宮古市水産課　（単位：千円）
注）「わかめ」「こんぶ」は宮古・重茂・田老魚市場の合計
注）「わかめ」は生くき、めかぶを含む

図２−15　海面養殖業収穫高（宮古・重茂・田老町漁協の合計）

んになります。1975（昭和 50）年頃から大衆魚であるイワシ、ニシン、サンマ、イカなどの漁獲量が大きく減り、「とる漁業から育てる漁業」への転換が図られました。

本市の水産業は、サケふ化放流事業など「つくり育てる漁業」を推進し、岩手県の水産業の中核をなす地域となっています。近年は、寒流で移動するサケやサンマが激減し、暖流で移動するサバ・ブリとイワシが増加しています。養殖は、田老地域の沿岸部と重茂地区でのワカメとコンブが主力です。マガキとホタテの養殖も盛んです。近年の地球温暖化や国際競争等による水産資源の減少などにより、水揚量が過去最低を更新して減少しており、宮古トラウトサーモン（ニジマス）の養殖など「つくり育てる漁業」がさらに進められています。

（ｄ）鉱工業

北上山地は鉱物資源も豊富な地域で、市内では旧田老町鋤（すき）の沢（さわ）の田老鉱山がその代表です。田老鉱山は、ラサ工業株式会社が 1936（昭和 11）年に操業を開始し、銅・硫化鉱・鉛・亜鉛などを採掘しました。鉱石は索道によって宮古の鍬ヶ崎貯蔵庫に運ばれ、ラサ工業小山田精練所で銅や化学肥料が生産されました。鉛や亜鉛、硫化鉱は、出崎（でさき）ふ頭から船舶で九州や関西方面に運ばれました。最盛期には数千人もの街となった田老鉱山も、ドルショックと銅の国際価格の下落などにより、1971（昭和 46）年 12 月に閉山されました。下の表のように、かつては北上山地の鉱物資源を生かして、鉄、マンガンなどが採掘されましたが、現在はそのすべてが廃業しています。

表２－８　宮古市内で稼業した鉱山　　『宮古商工案内』昭和 26 年度版・『新岩手鉱山誌』より

名　称	所在地	鉱種名	名　称	所在地	鉱種名
山口鉱山	山口	銅、鉄、ﾀﾝｸﾞｽﾃﾝ	安国鉱山	江繋	アンチモン
千徳鉱山	千徳	鉄	茂市鉱山	茂市	マンガン
山口鉱山	田代・北ノ又	モリブデン	蕨沢鉱山	茂市	マンガン
田代鉱山	田代・臼杵	硅石	岩手花輪鉱山	長沢	マンガン
門神鉱山	花原市	苦灰土	北頭鉱山	津軽石堀内	金、銀、銅、ﾓﾘﾌﾞﾃﾞﾝ
蓬平鉱山	腹帯	金	崎山鉱山	崎山・箱石	金、銀、モリブデン
田老鉱山	田老鋤の沢	銅、硫化鉄	東田代鉱山	門馬	金
根城鉱山	老木	鉄	大銅鉱山	田老	銅
長者森鉱山	小国	金、ニッケル	早池峰鉱山	小国	モリブデン

現在、本市の主力工業は、コネクタを主とする電子部品製造業、合板・集成材を主とする木材・木製品製造業、水産加工を主とする食料品製造業、金型部品を主とする生産用機械器具製造業となっています。

（ｅ）商業

宮古市街は、江戸時代以来、宮古港による江戸との交易で発展した港町で、その中心は港に面した鍬ヶ崎町と代官所が置かれた宮古町でした。明治以降は、宮古港の貨物の集散によって繁栄しました。1933（昭和８）年の統計によると、宮古港移出入貨物のうち金額で、移出品目は１位から３位が「魚類、飲食物・煙草」、「肥料及び飼料」、「木竹藤材又同製品」で、移入品目は１位から３位が「魚類、飲食物・煙草」、「穀物及び種子」、「絹綿織物及び同製品」となっています。移出入先は、どちらも塩釜と東京が抜きん出ています。

1934（昭和９）年の国鉄山田線宮古駅開業以後、宮古駅前に末広町商店街が形成され、市街地は本町・新町・向町から西へ拡大しました。終戦後は小売業、サービス業を中心とした、いわゆる繁華街型の商店街となりました。また、終戦後には、市街地の山口川沿いの片桁（現在の本町）や新町、田町（現在の向町）を中心に、様々な露店が出店していました。道路使用の規制強化などにより、こうした露天商が 1960（昭和 35）年に大通三丁目に仮設市場で「宮古魚菜市場」として営業を開始しました。1968（昭和 43）年に五月町の現在地に移転し、現在も「宮古市民の台所」として親しまれ、海産物を求める観光スポットにもなっています。

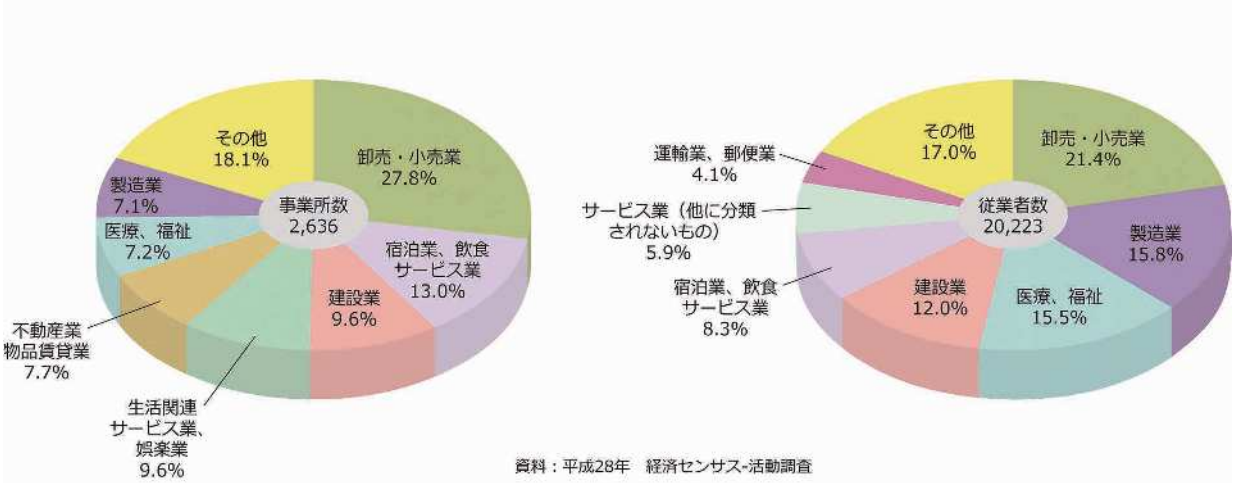


図２-16　産業大分類別事業所･従業員数の割合

本市の事業所数は、「卸売・小売業」、「宿泊業、飲食サービス業」が 40.8%を占めていますが、人口減少や大型店の出店、インターネット・通信販売の普及により、購買の流失や集客の減少が続いています。収入の減少や後継者難もあり、閉店・廃業する事業者が増加傾向にあるなかで、東日本大震災により事業所や従業者数の減少がさらに進んでいます。

（ｆ）観光

本市は、海に三陸復興国立公園、山に早池峰国定公園を有し、自然環境に恵まれています。本市を含む陸中沿岸国立公園は、1955（昭和 30）年に岩手県普代村から釜石市までが指定され、その後に岩手県久慈市から宮城県気仙沼市までの区域に拡張されました。東日本大震災後の 2013（平成 25）年５月に、青森県八戸市から階上町までの種差海岸階上岳地域が拡張され、三陸復興国立公園として指定されました。2015（平成 27）年３月には宮城県気仙沼市から石巻市までの南三陸金華山地域が拡張され、その後も石巻市の一部等が拡張されています。早池峰山とその周辺の薬師岳、鶏頭山を含む一帯は、1982（昭和 57）年６月に早池峰国定公園に指定されました。

本市の観光客入込数は、名勝地浄土ヶ浜を中核に、年間 100 万人に達しています。2011（平成 23）年の東日本大震災津波被害によって、浄土ヶ浜が被災し、年間観光客は 33 万人にまで落ち込みましたが､その後の交通インフラの復旧や観光プロモーション等によって回復しました。2018(平成 30）年には、ラグビーワールドカップ 2019 日本大会や三陸鉄道全線開通の効果により、震災前を上回りました。しかしながら、新型コロナウィルスの流行による行動制限によって、再び 100 万

人を割り込みました。

「三陸ジオパーク」や「みちのく潮風トレイル」に加え、「瓶ドン」、「宮古トラウトサーモン」、「真鱈」など食のブランドを活用して誘客と地域振興を図っています。

2022（令和４）年７月には、浄土ヶ浜遊覧船「宮古うみねこ丸」がリニューアル就航し、浄土ヶ浜と出崎ふ頭を拠点とした遊覧船、小型船舶による「青の洞窟さっぱ船遊覧」を利用した海洋ツーリズムを推進しています。また、大型外国客船や訪日外国人旅行客を受け入れるインバウンド対応など、多様な観光ニーズに対応する魅力ある「もてなし観光」を目指して取り組みを進めています。

図２-17　観光客入込数の推移

（４）祭りとイベント

（ａ）伝統的な祭礼行事

無形民俗と言える主な伝統行事は、以下のとおりです。旧村社の例年の祭礼で、神輿渡御が行われるもの、菩提寺で盆に鹿踊や剣舞が供養を行うものなど、地域の人々が参加する行事を取り上げました。

表２-９　主な伝統行事と祭礼

時期	地　区	行事名	内　　容
１月	山　口	黒森神楽の巡行	舞立神事、門打ち
	宮　町	横山八幡宮裸参り	除災・火防
	小　国	火祭り	末角神楽
４月	花　輪	華森神社例大祭	花輪鹿子踊り奉納
５月	田　老	田老三社例大祭	神輿海上渡御
	長　根	長根寺御玉尊祭	護摩祈祷・神楽奉納
６月	区　界	兜明神例大祭	田代念佛剣舞奉納
	重　茂	黒崎神社例大祭	神輿海上渡御
７月	江　繋	八坂神社例大祭	神楽奉納
	藤　原	比古神社	神輿渡御、小沢獅子踊り・神楽奉納
	鍬ケ崎	熊野神社例大祭	神輿海上渡御、神楽奉納
	山　口	黒森神社例大祭	神楽奉納
	光岸地	湊大杉神社例大祭	神輿海上渡御、小沢獅子踊り・神楽奉納

８月	田　代	盆供養（久昌寺）	田代大念仏剣舞供養踊り
	花原市	盆供養（華厳院）	牛伏念仏剣舞供養踊り
	和井内	盆供養（宝鏡院）	和井内清水獅子踊供養踊り
	川　内	盆供養（流月院）	川内鹿踊・夏屋鹿踊供養踊り
	小　国	盆供養（大円寺）	末角鹿踊供養踊り
	区　界	盆供養	田代念佛剣舞供養踊り
	津軽石	津軽石稲荷神社例大祭	神輿渡御、津軽石さんさ・法の脇獅子舞・根井沢剣舞奉納
	茂　市	熊野神社例大祭	神輿渡御、茂市鹿子踊・神楽奉納
	小　国	賀茂神社例大祭	神輿渡御、末角鹿踊・末角神楽奉納
９月	小　国	早池峰新山神社例大祭	神輿渡御、湯澤鹿踊・神楽奉納
	千　徳	千徳八幡宮例大祭	神楽奉納
	宮　町	横山八幡宮例大祭	神輿海上渡御、小沢獅子踊り・神楽奉納
	津軽石	赤前八幡宮例大祭	神輿渡御、神楽奉納
10 月	磯　鶏	稲荷神社例大祭	神輿渡御、神楽奉納
11 月	津軽石	又兵衛祭り	又兵衛人形、鮭豊漁祈願
12 月	魚菜市場	お飾り市	

神社祭礼は、盆前後の夏秋を中心に行われ、鍬ヶ崎の熊野神社・光岸地の湊大杉神社・宮町の横山八幡宮の例大祭では、かつては曳き船が行われ、神輿を船に乗せて漁船が列をなして宮古湾内を一周しました。川井地域小国地区では、祭りに際してご神体と権現様を別当家の行屋から神社へお連れする行列が今も行われています。

神輿の海上渡御

神輿船で奉納される恵比寿舞

早池峰新山神社の行列

（ｂ）新たな「まつり」とイベント

産業振興や地域振興等のため、様々なイベントや「まつり」が実行委員会や行政主催で行われています。宮古鮭まつりは、津軽石川の鮭留漁で行われていた新年の「網開き」行事がイベント化したもので、2021（令和３）年 12 月に 50 周年を数えました。宮古夏祭りは湊大杉神社の例祭に合わせて、みやこ秋まつりは横山八幡宮の例祭に合わせて、商店街や出崎ふ頭で行われてきました。また、近年は道の駅を会場に産直施設を活かして地域の特産物や郷土料理を販売するイベントが開催されています。鮭あわびまつり（田老）・重茂味まつり・やまびこフェスタ（川井）・新里まつり等は、市内外から多くの来場者があり楽しまれています。

表２-10　新たな「まつり」とイベント

時期	地区・会場	行　事　名	目　的
１月	魚市場	宮古真鱈まつり	産業振興
２月	重茂	宮古早採りわかめ「春いちばん」まつり	産業振興
	市民文化会館	宮古市民劇	芸術文化
３月	魚市場	宮古毛ガニまつり	産業振興
	文化会館	みやこ郷土芸能祭	文化財
	田老防潮堤	東日本大震災慰霊行事	防災
４月	閉伊川・津軽石川	鮭稚魚壮行会	産業振興
５月	浄土ヶ浜	浄土ヶ浜春の催し	観光
	田老	復興たろう大漁まつり	地域振興
６月	川井	早池峰山山開き	地域振興
	川井	閉伊川釣り大会	地域振興
	川井	北上山地民俗資料館「小国分館神楽共演会」	文化財
７月	浄土ヶ浜	浄土ヶ浜「夜市」	観光
	末広町商店街	昭和思い出探し宮古の七夕	商店街振興
	出崎ふ頭	「海の日」宮古港カッターレース	スポーツ振興
	出崎ふ頭	宮古夏まつり	観光・地域振興
８月	重茂	重茂味まつり	地域振興
	道の駅田老	おらほの夏まつり	地域振興
	リアスハーバー	宮古港ボート天国	港湾振興
９月	茂市	閉伊川川下り大会	地域振興
	宮古	みやこ秋まつり	地域振興
	道の駅やまびこ館	やまびこフェスタ	地域振興
10 月	浄土ヶ浜	宮古秋の味覚まつり	観光
	市民体育館	宮古産業まつり	産業振興
	茂市	新里まつり	地域振興
	リアスハーバー	三陸シーカヤックマラソン in 宮古	観光
	小国分館	北上山地民俗資料館「水車の畑まつり」	文化財
	川井	川井郷土芸能祭	文化財
	各公民館	公民館まつり	生涯学習
11 月	縄文の森ﾐｭｰｼﾞｱﾑ	崎山貝塚縄文まつり	文化財
	宮古・赤前	宮古サーモン・ハーフマラソン大会	スポーツ振興
	市民文化会館	市民芸能まつり	生涯学習
	ふるさと会館	和井内ふるさと収穫祭	地域振興
	江繋	江繋収穫感謝祭	地域振興
	小国	踊りフェスタ OGUNI	地域振興
	道の駅たろう	田老鮭・あわびまつり	産業振興
12 月	津軽石	津軽石郷土芸能祭	文化財

	宮古／津軽石	宮古鮭まつり	産業振興
不定期	鍬ケ崎	鍬ケ崎元気市	地域振興
	市民文化会館	寄席・落語会	芸術文化

東日本大震災後は、津波伝承の一環として、田老地域で毎年３月 11 日に防潮堤で慰霊行事を行っています。鍬ヶ崎元気市は、キッチンカーなどの露店が集まり、人口が減少した被災地の賑わい創出の一翼を担っています。震災後の被災地慰問は、多種多様なイベントや取り組みが行われ、現在は被災者の心の復興事業として落語会等が継続的に行われています。

（ｃ）学びと体験

観光・交流人口の拡大や地域振興の一環として、また教育や地元への愛着心の醸成といった観点から各地で学びや体験型の事業が展開されています。こうした取り組みは、『宮古まるごと体験ガイドブック』に体験メニューとしてまとめています。本市では森・川・海の自然体験をテーマとするものが多く、海岸沿いの自然の道を歩くみちのく潮風トレイル、大地をテーマに地質・自然・文化を学ぶ三陸ジオパーク等のガイド活動が、三陸海岸の新たな魅力を創出しています。ワカメやカキの養殖に関連する水産業、林業に関わる体験も行われています。さらに、農業は食と関連付けられ、郷土料理のソバや雑穀を材料としたキビ団子・豆すっとぎ・キリセンショ等の体験メニューがあります。

東日本大震災の記憶の伝承として、特に田老地域では防災学習に取り組み、修学旅行の受け入れも行っています。歴史・文化の分野では、崎山貝塚縄文の森ミュージアムで縄文時代の暮らしを体験する弓矢やペンダント作りを行っています。北上山地民俗資料館では、昔の技術を学びながら小物を作る体験を行うことができます。

表２-11　学びと体験

分野	学び・体験のメニュー	時　期	事業主体
ジオパーク	浄土ヶ浜ジオガイド・ナイトツアー	通年	一般社団法人浄土日和
	みちのく潮風トレイル× Trail town MIYAKO	通年	一般社団法人浄土日和
	青の洞窟・サッパ船体験	３～ 11 月	浄土ヶ浜マリンハウス
	本州最東端鮭ヶ崎クルーズ	通年	個人
防災学習	学ぶ防災ガイド	通年	一般社団法人宮古観光文化交流協会
	震災メモリアルパーク中の浜ガイド	通年	休暇村陸中宮古
	震災学習（体験談とグループ学習）	通年	グリーンピア三陸みやこ
森の体験	かわい木の博物館体験	4 ～ 11 月	宮古市川井総合事務所
	押し花コースター・しおりづくり	通年	区界高原ウォーキングセンター
	陶芸体験	４～ 12 月	湯ったり館
	林業体験	４～ 11 月	箱石・森を考える会
	自然観察会・森林環境学習	通年	小沢の里山をつくる会
	岩泉線レールバイク	４～ 11 月	和井内刈屋地域振興会
	季節の自然観察会	通年	NPO 浄土ヶ浜ネイチャーガイド
	三陸裂織	通年	みやこ体験広場

川の体験	閉伊川源流沢登り体験	４～11 月	自然保護指導員
	閉伊川で遊ぼう	７～９月	さんりく ESD 閉伊川大学校
海の体験	地引き網漁体験	春～夏	グリーンピア三陸みやこ
	シーカヤック・クルーザー体験	５～10 月	三陸ｼｰｶﾔｯｸｽｸｰﾙ Sea-son
	三陸海岸トレッキング体験	３～12 月	個人
	ワカメ芯抜き･ホタテ貝絵付け･夢入り缶	通年	岩手県立水産科学館
	鮭の新巻作り体験	11 ～ 12 月	岩手県立水産科学館
	日出島漁港ホタテ水揚体験	４～11 月	（株）隆勝丸
	焼うに製造・わかめしゃぶしゃぶ・ワカメ芯取り	通年	宮古市重茂水産体験交流館
	海洋漂着ゴミの回収	通年	海洋漂着ゴミ回収ネットワーク
食の体験	いかせんべい手焼き体験	通年	（有）すがた
	竹輪づくり体験	通年	（有）丸徳
	ソバ打ち･雑穀料理､山里のくらし体験	通年	新里グリーン・ツーリズム そば打ち研究会
	リンゴ栽培体験	２～11 月	南澤果樹園
	木工・せんべい焼・郷土料理	通年	シートピアなあど
歴史文化	ｷｰﾎﾙﾀﾞｰ・ﾍﾟﾝﾀﾞﾝﾄ・縄文弓矢・火おこし	通年	崎山貝塚縄文の森ﾐｭｰｼﾞｱﾑ
	昔の技術で小物作り （すご編み・平織り・樹皮・えんつこ）	通年	北上山地民俗資料館

（５）文化財を活用したまちづくり

土地区画整理や道路拡張によって移転された石碑などが、都市公園等で保存･活用されています。東日本大震災後の鍬ヶ崎地区の復興まちづくりでは、新たに造成された公園に石碑を移転し、説明板を設置して、港で繁栄した地域の歴史文化を伝えています。

表２－12　公園に活用されている文化財

文化財及び地域の宝の名称	指定等	公園の名称	場所
一石一字経塚	県指定	舘合近隣公園	宮　古
暦応の碑	市指定	鍬ヶ崎児童遊園	鍬ヶ崎
県道盛岡宮古港線終点（石碑）	未指定	七滝公園	鍬ヶ崎
啄木寄港の地（記念碑）	未指定		
津波到達地（石碑）	未指定	切通し公園	鍬ケ崎
鴨墳の碑	市指定	青葉遊園	光岸地
織部灯籠	市指定		
宮古港戦蹟碑	未指定		
忠魂碑	未指定		
石碑（西国順礼塔など 17 基）	未指定	近内中央公園	近　内
津波到達地（石碑）	未指定	ふれあい公園	小山田
蒸気機関車	未指定	ＳＬ公園	磯　鶏
赤前御前堂	未指定	宮古市運動公園	赤　前

七滝公園

4　歴史的環境

（1）先史

（a）縄文時代

『岩手県遺跡台帳』によると、本市に登録されている遺跡663箇所のうち、縄文時代の遺跡は488箇所にも及びます（2023（令和５）年現在）。一方、旧石器時代の遺跡は市内では確認されておらず、現在のところ最も年代の古い遺跡は、縄文時代草創期の爪形文土器が出土した日の出町Ⅱ遺跡です。市域において縄文時代の遺跡に分布の偏りはあまり見られず、太平洋に面した沿岸部のほか、内陸部の新里地域や川井地域にも遺跡が確認されています。

貝塚と集落

縄文時代の遺跡のうち、「崎山貝塚」は国指定史跡として指定され、縄文時代前期から後期にかけての貝塚と集落の遺跡です。貝塚から出土する多様な骨角器のほか、大規模な土木工事による環状溝と広場を有する特徴的な集落が発掘調査で見つかっています。貝塚から出土する岩礁性のウニやアワビのほか、シカやイノシシなどの動物の骨、イワシやマグロ、カツオなどの魚類の骨、キノコ形土製品等の様々な出土品からは、自然資源を有効に利用する縄文人の暮らしをうかがい知ることができます。

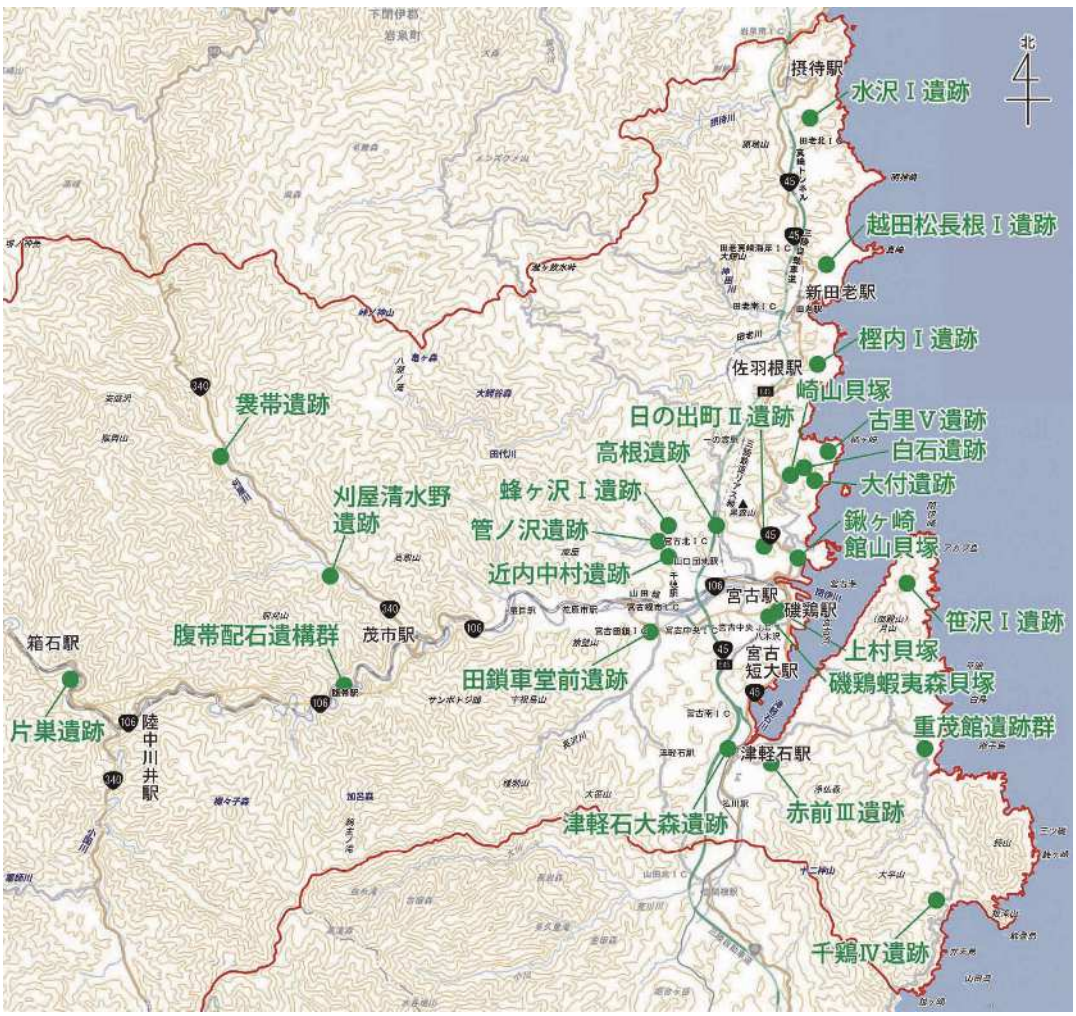


図２-18　縄文時代の主な遺跡分布図

「磯鶏蝦夷森貝塚」及び「腹帯配石遺構群」は市史跡に指定しています。磯鶏蝦夷森貝塚で発見された屈葬人骨や腹帯配石遺構群にみられる石の配列、そして縄文時代晩期の遮光器土偶に代表される土偶等からは、縄文人の祈りや精神性を垣間見ることができます。

約１万年間にわたる本市の縄文時代の遺跡は、時期によって遺跡数や遺物量が大きく変動するという特徴が見られます。縄文時代草創期は、日の出町Ⅱ遺跡の発掘調査によって土器等の出土は確認されていますが、居住の痕跡はみられません。縄文時代早期の日の出町Ⅱ遺跡や近内中村遺跡などで竪穴建物が確認されるようになり、土器の出土も多くなっていきます。縄文時代前期には、遺跡数が増加し遺物量も増えていきます。特に赤前Ⅲ遺跡や千鶏Ⅳ遺跡では、この時期に特徴的な平面の形が楕円形の大型の竪穴建物が見つかっています。

縄文時代中期は、縄文時代を通して最も遺跡数が多い時期で、崎山貝塚では祭祀の場である広場を囲むような環状溝を造るために大規模な土木工事が行われました。高根遺跡や越田松長根Ⅰ遺跡等のように竪穴建物数や遺物量がとても多い拠点的な集落です。この拠点集落は、現在の地区に相当する範囲に分布し、丘陵や急峻な山が多く平坦地の少ない本市では、縄文集落と現代の住宅地の立地が一致するのが特徴です。

縄文時代後期には遺跡数が減少します。この時期の集落では20棟以上の竪穴建物が見つかった近内中村遺跡が挙げられ、他の遺跡の多くは土器が出土するのみです。近内中村遺跡では、縄文時代後期後半の竪穴建物から出土した完形の巻貝形土器が特筆されます。巻貝を写実的に表現した秀逸な土器で、縄文人の工芸技術の高さを表わしています。

巻貝形土器（近内中村遺跡）

縄文時代晩期になると、後期と同様に遺跡数は少なく、近内中村遺跡において竪穴建物が90棟以上も見つかっています。菅ノ沢遺跡から出土した遮光器土偶はＸ線写真分析の結果、空洞である土偶内部に粘土塊が複数入っていることが分かり、子孫繁栄を願い胎児を表現したとされています。手に持って振ると音が鳴ることから「鳴る土偶」としても知られています。

遮光器土偶（「鳴る土偶」）（菅ノ沢遺跡）

広域にわたる交易・交流

ヒスイやアスファルト、黒曜石などの出土品により広域にわたる交易・交流があったことが確認されています。上村貝塚から出土した県内でも最大級のヒスイ製大珠は、縄文時代中期の装飾品で新潟県糸魚川産です。また、アスファルトは近内中村遺跡や蜂ヶ沢Ⅰ遺跡、越田松長根Ⅰ遺跡等から出土し、産出地は秋田県と分析されています。近内中村遺跡から出土した黒曜石は、産地分析の結果、北海道や長野県、宮城県等の各地の産地からもたらされたものです。

ヒスイ製大珠（上村貝塚）

（ｂ）弥生時代

弥生時代の遺跡

本市の弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡数と比較すると大幅に少なくなります。縄文時代後期から晩期にかけての遺跡数の減少と連続した傾向がうかがえるため、気候の冷涼化が関係していると考えられています。

弥生時代を定義付ける稲作に関連する水田跡や木製品、石器などは確認されていないため、稲作を中心とした生業は本市には入ってきていないといえます。しかし、上村貝塚や千鶏Ⅳ遺跡、赤前Ⅳ八枚田遺跡、和井内東遺跡などでは竪穴建物を含む遺構が確認され、人の営みの痕跡は少ないながらも見つかっています。さらに乙部野Ⅱ遺跡からは弥生時代前期の土器が竪穴建物からまとまって出土しています。

図２-19　弥生時代の主な遺跡分布図

土製紡錘車（鰹沢遺跡）

弥生時代後期土器
（長根Ⅰ遺跡）

弥生土器、石製品、土製品

上村貝塚や千鶏Ⅳ遺跡では、破片ではありますが弥生時代前期の土器が出土し、長根Ⅰ遺跡からは完形に近い弥生時代後期の土器が出土しています。また、上村貝塚では碧玉製の管玉や環状の石製品、鰹沢遺跡からは糸を紡ぐ時に使う土製紡錘車（はずみ車）も出土しています。本市周辺の沿岸部の様相と同じく、事例は少ないですが土器や石製品に弥生文化の要素の一端をみることができます。

（ｃ）古墳時代・飛鳥時代

古墳時代の遺跡

本市の古墳時代は、弥生時代同様、遺跡数が少なく、遺物も数えるほどしか見つかっていません。その中で、崎山貝塚からは勾玉の石製模造品が１点出土しています。さらに日の出町Ⅱ遺跡からは須恵器の坏の蓋の破片４点が出土しています。年代は６世紀代で、他地域からの搬入品とされています。また、田鎖車堂前遺跡からも須恵器の破片が出土しています。

須恵器（日の出町Ⅱ遺跡）

石製勾玉（崎山貝塚）

日本で最北の前方後円墳である奥州市角塚古墳からさらに北に位置する本市では、数少ない資料から須恵器などの古墳文化の伝播はうかがえますが、竪穴建物等の遺構は確認されておらず、集落や生業の様子はよくわかっていません。

図２-20　古墳時代・飛鳥時代の主な遺跡分布図

飛鳥時代の遺跡

本市の飛鳥時代は、古墳時代同様、遺跡数は少ないですが、東日本大震災からの復興発掘調査により類例が増えてきました。津軽石大森遺跡や沼里遺跡において、７世紀後半から８世紀前半の竪穴建物や土師器が確認され、次第に古代集落が形作られました。

（２）古代（奈良時代・平安時代）

本市の奈良時代・平安時代は、遺跡数が急増し、特に閉伊川と津軽石川の河川流域に遺跡が集中します。さらに標高 30 m程度の細長い尾根上に竪穴建物がつくられるなど、他の時代にはない特徴的な集落の立地状況が確認されます。

昆布献上記事と末期古墳

岩手県沿岸部を表わしている「閉伊」が文字資料として登場するのは奈良時代からで、『続日本紀』715（霊亀元）年条に「閉村」の記載があり、昆布を献上していた実態や郡家を建てたいとの嘆願が初出とされています。その後も「幣伊」などの文字が史料に散見されます。

「長根古墳群出土品」が出土した閉伊川流域の丘陵上にある長根Ⅰ遺跡からは、奈良時代の末期古墳が発見され、古墳の主体部には蕨手刀・直刀・立鼓刀・太刀が副葬されていました。また律令政府とのつながりを示唆する和同開珎が１点出土しています。岩手県沿岸部の末期古墳としては山田町の房の沢古墳群と並び２例のみであり、前述の昆布献上記事に名前が記述されている「須賀君古麻比留」と末期古墳との関連性がうかがえます。

和銅開珎（長根Ⅰ遺跡）

遺跡と生業

津軽石地区にある津軽石大森遺跡では、飛鳥時代から奈良時代、そして平安時代にかけて継続して竪穴建物がつくられ、集落の機能を長期間維持していました。さらに、赤彩土器や透かし付高坏、青銅製錘などの出土は、有力者の存在と、広域の交流・交易

青銅製錘（津軽石大森遺跡）

があったことを示します。この他、狐崎Ⅱ遺跡では南北に延びる幅５ｍほどの狭い尾根上に奈良時代の竪穴建物が５棟並んで検出され、また磯鶏館山遺跡でも尾根上に平安時代の竪穴建物が並んで構築されるなど特徴的な立地がみられます。この他、赤前Ⅳ八枚田遺跡では竪穴建物の内部からイソシジミ等の貝類がまとまって出土しています。周辺の遺跡では銛や釣針等の鉄製品が出土し、他地域への流通が想定されます。

田鎖車堂前遺跡は、100 棟以上の竪穴建物が検出した、閉伊川流域の古代における拠点的な集落です。また、他の集落にはない石敷きと溝を持つ祭祀遺構が検出されました。

図２-21　奈良時代・平安時代の主な遺跡分布

鉄生産遺跡

本市の奈良時代以降の特徴として、鉄生産遺跡の存在が挙げられます。奈良時代の遺跡からは刀子や砥石が出土し、末期古墳である長根Ⅰ遺跡には蕨手刀などの鉄製品が副葬され、鉄文化の普及がうかがえます。平安時代になると、原料となる砂鉄の採取や豊富な森林資源を利用した木炭生産を背景に、製鉄炉や鍛冶炉が多数確認されます。青猿Ⅰ遺跡や萩沢Ⅱ遺跡、賽の神Ⅲ遺跡、拝殿峠遺跡などでは製鉄炉が見つかります。さらに竪穴建物の床面に鍛錬鍛冶炉が確認される例として、近内館跡、小堀内Ⅲ遺跡、赤前Ⅳ八枚田遺跡、金浜Ⅰ遺跡、細越Ⅰ遺跡などが挙げられます。島田Ⅱ遺跡では尾根上に竪穴状の鍛冶工房が 20 棟以上も検出され、平安時代における鉄生産の一大拠点といえます。

製鉄炉（青猿Ⅰ遺跡）

このように、本市では奈良時代以降、鉄生産が産業化したことがわかります。鎌倉時代以降も鉄生産は継続して行われ、13 世紀代の松山館跡の製鉄炉や 15 ～ 16 世紀の山口館跡の鍛冶工房などが確認されています。

（３）中世（鎌倉時代・室町時代・戦国時代）

鎌倉幕府地頭閉伊氏

鎌倉時代には、幕府将軍源頼朝が鎮西八郎為朝の四男島冠者為頼に地頭職を与え、為頼は 1190（建久元）年に閉伊郡に下向して根城に居住したといいます。閉伊郡の半分、四十八郷を治め、閉伊氏を名乗りました。1285（弘安８）年に閉伊三郎左衛門十郎は、北条時貞より鎌倉由比ガ浜に一戸主（一宅地所領）を与えられました（北条貞時領地状）。鎌倉時代末期には、閉伊三郎左衛門光員の死後、一族に領地の相続争いが起こりました。1324（元亨４）年北条高時決裁状により、息子に呂木（老木）・閉河・田久佐利（田鎖）・小山田・閉崎・赤前の地頭職が譲られました。鍬ヶ崎、笠間（山口）は、他の親族が分割して知行しました。

南北朝時代初期の 1337（建武４）年、鎮守府将軍北畠顕家に従って西上した奥州軍 10 万余騎のうち、利根川先陣の功名を遂げた「部井十郎」（太平記巻 19）は、閉伊十郎すなわち十郎左衛門尉光頼の子息親光と推察されます。閉伊氏一族の家門は栄え、田鎖・刈屋・和井内・茂市・長沢・花輪・大沢・箱石・蟇目・中村・重茂などの諸家が割拠し、「田鎖党」「田鎖十三家」などと称されました。

根城館跡（遠景）

城館の時代と閉伊の馬

国人領主となった中世・戦国時代の武士は、戦時の防御と眺望を得るため、要害の地に館と言われる城館を建設して所領を守り治めました。川を水濠とし、山の崖や急斜面を利用し、尾根を堀で切って敵の侵入を防御します。山上は削って平場に造成し、木造の館（屋形）を建てていました。

南北朝後半から室町期にかけて南部氏の攻勢が強まり、田鎖党は半独立的立場を維持しつつも南部の配下に属したとされます。黒森神社に伝わる 1370（応安３）年の棟札には「当郡地頭南部光録・南部伊予守信長」とあり、南部氏が地頭になっていました。信長は、南部 11 代信行が相続するまでの名であり、黒森の社を建てたことが『御当家御記録』で確認できます。

中世の閉伊郡は糠部・久慈などと並ぶ馬産地として知られました。一条兼良（1402-81）著『尺素往来』には、祇園御霊会警固の侍所面々の乗馬として 20 疋の馬の筆頭に、「田久佐理之本牧両三疋候」とあり、閉伊の田鎖牧から京都に贈られた駿馬について記しています。1528（大永８）年、伊勢下総入道貞頼の筆になる武家故実の書『条々聞書』にも田鎖の馬印が記されています。こうした史料から、室町中期の京都において、閉伊郡が全国随一の馬産地の評価を得ていたことがわかります。

閉伊侍の戦国物語

1502（文亀２）年には南部 20 代信時が「閉伊郡ノ押領司田鎖氏ノ一統ヲ打亡」し、一戸信濃守政英が千徳城に入部したとされます。千徳伊予守行重は、南部氏一門の一戸氏出身で、閉伊衆を服従させ、目代として千徳城に居住したとの記録があります。一戸千徳氏は兄弟で宮古地方を治め、長男が千徳城に、次男が八木沢館、三男が払川館（津軽石）に居城し、八木沢氏、津軽石氏を名乗ったと伝えます。一方、南部家津軽の浅瀬石城（現：青森県黒石市）に入った浅石氏は千徳氏と称し

ました。汗石（浅瀬石）川の石を津軽石川に持ってきて鮭がのぼるようになったといった伝説もあり、こうした縁で本市と黒石市は、1966（昭和41）年に姉妹都市協定を締結しています。津軽石城主鬼九郎は、鮭を本家である千徳殿に献上する約束を守らなかったため、1583（天正11）年の正月の挨拶に千徳城を訪れたところを千徳殿に討ち取られたという伝説も残されています。

青森県三戸郡の南部信直が南に勢力を拡大し、1588（天正16）年に閉伊一郡を手中に治めました（『祐清私記』）。1590（天正18）年には豊臣秀吉の天下統一の総仕上げである「奥羽仕置」が行われ、7月に信直に閉伊郡をふくむ七郡が安堵され、大名南部家による支配が確定します。秀吉による諸城破却の命令により、1592（天正20）年6月、千徳城（一戸孫三郎持分）と田鎖城（佐々木十郎左衛門持分）が破却されました。ここに戦国の国人領主による城館の時代は終わりを告げました。

千徳城　縄張り図

（4）近世（江戸時代）

港町宮古の始まり

南部氏は、江戸幕府からも所領を安堵されました。第二代盛岡藩主南部利直は、領内の整備・安定などにあたり、1615（元和元）年に領内の視察で宮古を訪れて町割りをしたのが、町の発祥となっています。この時に「本町」と命名された町名が、現在も残されています。その後、寛永年間（1624-43）には藩の御手船「宮古丸」と「虎丸」が配備され、1632（寛永9）年には新町と横町、田町、向町が設定され、現在の市街地の基礎となりました。築地一丁目の旧中央公民館（御蔵ヶ沢）に宮古代官所が設置され、宮古が閉伊地方の政治・経済の中心に位置付けられました。

町割り石

宮古湾の海産物による江戸との交易

宮古湾は、北上山地と重茂半島による断崖と岩場、そして閉伊川と津軽石川河口付近は遠浅の海岸となっているため、多様な海産物の宝庫です。また、宮古港となった鍬ヶ崎浦は、重茂半島が太平洋の荒波をさえぎり、湾口方向の北に臼木山があるため、波が穏やかで天然の良港です。1797（寛政9）年の『邦内郷村志』によると、当時の産物は、鮭塩引・鯛・鮃・鱸・鱒・鰯・赤魚・鰹・鰹節・蛸・鮑・鰈・鯣・唐貝・魚油・魚〆粕・塩などが記録されています。また、昆布を乾かして砕

いた「布の粉」は庶民の常食で、飢饉の多い南部領では他領への積出しを禁止した貴重な食料でした。

江戸時代中期には鰯の地引網が始まり、豊富な鰯を原料に江戸で需要が高まった肥料、〆粕（干鰯）を生産し、魚油も江戸へ送られました。文政年間（1818-29）には、宮古湾内の鬼形（重茂追切一丁目）で建網漁業が始められ、建網は漁獲高を飛躍的に増大させました。

江戸が巨大都市へと成長し、東廻海運（航路）が整備されたことにより、東北諸藩が太平洋を南下して一大消費地である江戸に、米をはじめとする物資を大量輸送することが可能となりました。豊富で良質な三陸漁場の海産物を商品として、海運による江戸との交易を行ったのが廻船問屋です。宮古港を擁する鍬ヶ崎浦、代官所が置かれた宮古町は、江戸為登船や松前渡海船の絶好の停泊地となり、廻船問屋や五十集（海産物）商人が軒を並べ、旅籠・船宿・料亭や蔵が立ち並ぶ港町として領内随一の繁華地へと発展しました。「南部領宮古港」とは「鍬ヶ崎港」のことで、『三閉伊日記』には「鍬ヶ崎湊ハいたって舟入よく、なに船にてもこの沖合通船ハこのま（湊）に入らざることなし、故ニ御領内一の繁地也」と記されています。

鍬ヶ崎（『三閉伊日記』より）

南部鼻曲り鮭（盛合家）

岩手県には産卵のために鮭が遡上する川が数多くあり、その中でも本市の津軽石川は、漁獲量が常に県内首位を占めています。鮭は川を遡上する時期には十分成熟し鼻が曲がるため、「南部の鼻曲り鮭」として江戸でも有名になりました。津軽石の盛合家（屋号：若狭屋）は、宮古湾で廻船問屋（漁業・交易）を創業し、津軽石川鮭留漁の瀬主として隆盛しました。鮭の資源保護を行いながら、地元の鮭留漁を請負う権利を守って活躍します。また、酒屋（酒造業）・質屋（金融業）を兼業し、1774（安永３）年には武士の身分に取り立てられた上流商家の代表的な存在です。

商人の活躍（東屋）

江戸時代を通じて多くの商家が発展し、藩政や地域経済にも貢献する中、東屋（屋号）は江戸後期の 1824（文政７）年に現在の中心市街地である本町で酒造業を創業しました。1833（天保３）年には持ち船で江戸との交易を開始し、木綿や古着も商い、1844（弘化元）年には質屋を開業するなど、幕末期に急速な発展を遂げます。幕末から明治の動乱で多額の損失を計上する中、宮古・鍬ヶ崎の困窮者に手当金を拠出し、近隣の町へ支店を出して地域経済にも大きく貢献しました。明治以後も東屋は大店として宮古湾埋め立てなどの社会資本整備に貢献します。分家である菊長（屋号）

が北洋ラッコ猟や盛宮自動車を起業、衆議院議員となるなど一族が当地方の発展を支える存在でした。

閉伊街道と牧庵鞭牛

江戸時代に盛岡城下と領内主要港である宮古港を結ぶ街道は、「戸川（閉伊川）通」あるいは「宮古街道」と記され、三陸沿岸の海産物と内陸の米穀が行き交う重要なルートでした。しかし、沿岸部と内陸平野部との間には、北上山地が南北に縦走しており、急峻な崖や川渕など難所も多い危険な行程でした。江戸時代、盛岡城下との往来には片道２泊３日を要しました。幾度も街道整備が行われ、牧庵鞭牛（ぼくあんべんぎゅう）は1755（宝暦５）年の大飢饉からの難民救済の一環として、道路改修に取り組みました。閉伊街道のうち、蟇目から平津戸（ひらつと）までの危険な難所を地域住民の協力により改修整備しました。また、釜石から山田・長沢を経て腹帯で閉伊街道に合流する脇街道も整備しており、沿岸と盛岡を結ぶねらいが見て取れます。また、1823（文政６）年には五戸（ごのへ）商人藤田武兵衛も松草から刈屋までの宮古新道を開削・改修しています。

木材と養蚕

養蚕は、蟇目村・腹帯村・川井村・箱石村など閉伊川流域の山村を中心に宝暦年間（1751-64）から行われました。1818（文政元）年には、盛岡商人による蚕種請負に反対し自由直買を願い出ています。1859（安政６）年の川井地域の蚕神供養塔には、施主として盛岡と伊達の商人が上段に、中下段に夏屋・蟹岡・腹帯百姓の連名が刻まれています。

山林面積が90％を占める新里地域・川井地域は、林業が盛んでした。早池峰山系を水源とする御山川流域一帯は、「門馬御山」と称する藩有林でした。山守には江戸時代初期から門馬の修験妙泉院（しゅげんみょうせんいん）があたり、貞享年間（1684-88）から御山奉行に任命されていました。平津戸村でも文化年間（1804-17）に毎年、柾（まさ）２千駄分を伐り出し城下で商売する礼金として、柾２百駄を上納していました。

また、農家の副業として刈屋村や閉伊川流域の村で「閉伊川紙」、「刈屋紙」とよばれる和紙が生産され、1611（寛文元）年に成島紙（現花巻市）と閉伊川紙が藩によって寸法を統一された記録もあります。

金山から鉄山へ

江戸時代初期には、金が藩の重要な産物となり、1610（慶長15）年に藩主南部利直が小国金山の運上金（税）受け取りの黒印状を出しています。1644（寛永21）年に腹帯金山に抗夫が集まっていたことがうかがえ、1652（慶安５）年には閉伊川通金山奉行が派遣されました。1663（寛文３）年には刈屋金山・夏屋金山が操業を始めました。

金山が枯渇すると鉄生産へと切り替わり、1776（安永５）年には仙台商人が野田鉄山の鉏鉄を宮古港で一手に買い取っています。1843（天保14）年には宮古町徳兵衛が田老村猪子鉄山の支配人となり、1849（嘉永２）年には鈴子鉄山も操業しています。幕末に橋野鉄鉱山（現在の釜石市）での高炉による製鉄に成功した盛岡藩は、慶応年間（1865-67年）に近内に大島高任（おおしまたかとう）を派遣し、製鉄場建設を計画しましたが、幕末維新の動乱により実現しませんでした。

幕末の海岸防備と宮古港海戦

江戸幕府の鎖国政策によって、1639（寛永16）年に諸大名に沿岸防備が命じられ、重茂に遠見番所（とおみばんしょ）が設置され浦番が派遣されました。1825（文政８）年の異国船打払令により、異国船に対して

盛岡藩でも海岸に大砲を備えて警備しました。1856（安政３）年に宮古市内では宮古浦鏡岩、鍬ヶ崎浦穴崎・館ヶ崎・出崎、磯鶏浦樫揚館、重茂浦戸ノ崎（閉伊崎）など９箇所に御台場（砲台場）があったと記録されています。

戊辰戦争の最終段階である箱館戦争の直前、1869（明治２）年５月６日（旧暦３月 25 日）明け方、蝦夷地（北海道）を占拠していた旧幕府脱走軍の軍艦「回天」は、追討軍として北上してきた新政府艦隊８隻が停泊する宮古港にたった１隻で突入しました。不利な戦況を打開するため、回天を新政府海軍の主力艦「甲鉄」に接舷し、兵士を乗り込ませて甲鉄を奪い取る作戦でした。当初は回天の奇襲に慌てた新政府艦隊の各艦船も徐々に応戦し、次第に回天側の死傷者も増加してきたため、ついに回天は甲鉄の奪取を断念して退却します。この間わずか 30 分あまりの戦闘でしたが、旧幕府軍に元新撰組副長土方歳三、新政府軍に後の連合艦隊司令長官東郷平八郎が、この戦闘に従軍していました。回天の冒険的な戦術と８隻の艦隊に対してたった１隻で突撃した勇気が称揚され、宮古港海戦は日本人による洋式海戦のさきがけとして後世に顕彰されてきました。

宮古港海戦の図

（５）近現代

明治の閉伊川河口埋め立て

明治維新後も三陸沿岸随一と言われた宮古港は、船舶の大型化や物資の増加に対応するため、閉伊川左岸の埋め立てが計画されます。1880（明治 13）年５月、地元の有力商人が宮古湾の埋め立て工事に着手し、1882（明治 15）年７月に完成し築地地区が誕生しました。宮古橋下から光岸地までを埋め立て、新川町に運河を通し、築地に船着場が設けられました。

日本人のみの手による最初の海図は、1872（明治５）年８月に刊行された『陸中国釜石港之図』です。これにつづき、10 月に第３号『宮古港』が刊行されました。当時、外国に対して開港していた東京と函館を結ぶ航路の中間補給地点として重要な港であったことがうかがえます。

三陸汽船と宮古港線

北上山地に隔てられた宮古にとって、港はまさに玄関口でした。明治時代の中頃から東京湾汽船株式会社が貨物船・客船を定期運行しましたが、地元資本による三陸汽船が誕生します。1908（明治 41）年に就航した三陸汽船は、鍬ヶ崎港から久慈・塩釜間に定期航路が走り、東京・函館に向かう船もありました。

汽船によって東京へつながる宮古港と県都盛岡を結ぶ宮古街道はいっそう重要となり、1881（明治 14）年に県道「宮古街道」に認定され、宮古と鍬ヶ崎が県の三等宿駅に設定されました。

郡役所のある宮古と、流通経済にとって重要な港湾である鍬ヶ崎は険しい山に隔てられて、両町の往来は夏保峠を越え

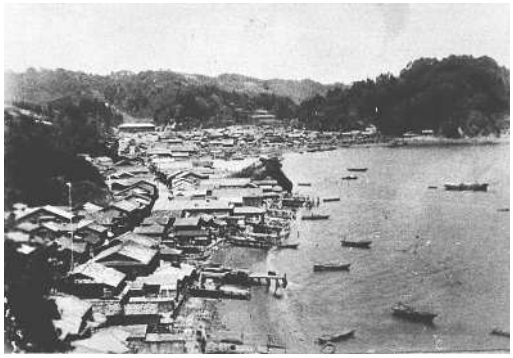
宮古港に停泊する三陸汽船

るさびしい道でした。1882（明治15）年、閉伊川河口の埋め立て完成に合せて、両町の境界である光岸地（こうがんち）に切通しを開削しました。これによって宮古・鍬ヶ崎の一体化が実現し、港湾を中核に港町宮古は発展の一途をたどりました。1917（大正６）年には鍬ヶ崎の埋め立てが完成し、1920（大正９）年３月に道路法による県道路線「盛岡宮古港線」に認定されました。

大正時代の鍬ヶ崎埋め立てと宮古町の発展

1912（明治45）年には新川町運河を埋め立て市街地化し、1913（大正２）年には鍬ヶ崎埋立同盟会が設立されました。２千７百坪の鍬ヶ崎前埋め立て工事は、1917（大正６）年10月に完成し、現在の鍬ヶ崎市街地が形成されました。宮古･鍬ヶ崎の有志による宮古商工会が設立され､1924（大正13）年に両町の合併が実現しました。

県都盛岡と主要港宮古を結ぶ宮古街道は、明治維新後に県道となり、1871（明治４）年と1899（明治32）年から五ヶ年計画で大改修工事が行われます。1913（大正２）年に盛宮自動車株式会社による路線バス（乗合自動車）の運行がはじまりました。待望の鉄路は、1920（大正９）年に山田線の敷設が決定し、1933（昭和８）年に盛岡から川井までが開通、翌1934（昭和９）年に宮古駅が開業しました。以後、宮古町は末広町商店街や大通り商店街が形成され、市街地は西へ拡大しました。



埋め立て前の鍬ヶ崎　明治40年頃

昭和の宮古港修築と田老鉱山

1927（昭和２）年、宮古港は政府から第二種重要港湾の指定を受け、1930（昭和５）年に出崎埠頭の築港工事に着手し、1937（昭和12）年５月に完成しました。これにより、現在の出崎埠頭に３千ｔ級の船舶２隻が接岸できる岸壁と竜神港から255ｍの防波堤などが建設され、８万２千㎡の埋立地が造成されました。

田老地域の西部山間部は地下資源の宝庫であり、江戸時代には笹平鉄山・猪子鉄山などが操業していました。1936（昭和11）年から田老鉱山でラサ工業田老鉱業所により硫化鉄鉱・銅・鉛・亜鉛などの採掘が本格操業

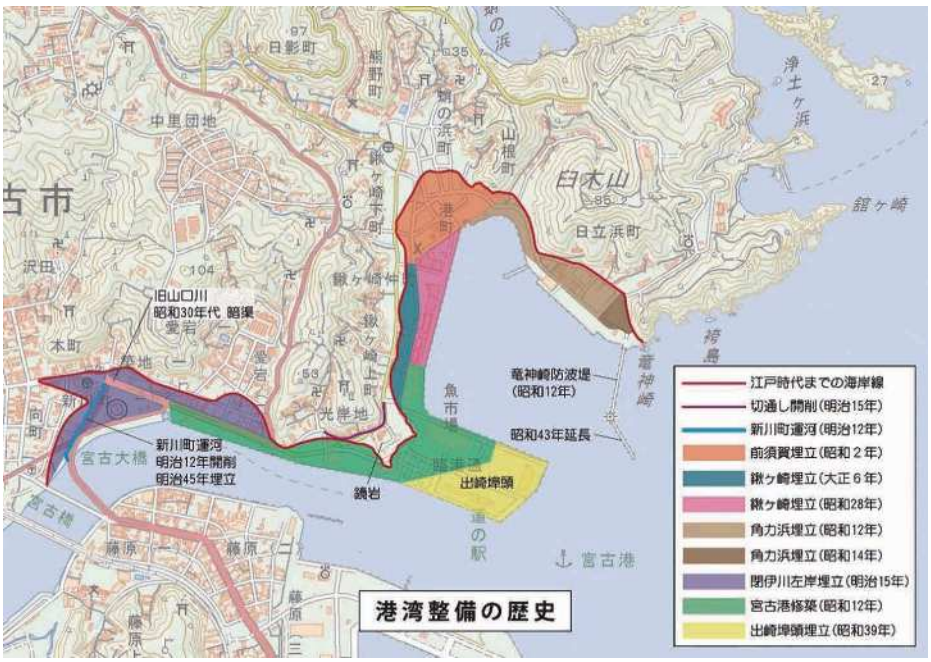


図２-22　港湾整備の歴史

し、旧田老町の基幹産業となりました。精鉱は、索道（ロープウェイ）によって宮古の鍬ヶ崎貯鉱庫に運搬されました。1939（昭和 14）年にはラサ工業宮古精錬所が建設され、宮古駅から出崎埠頭への鉄道臨港線とラサ工業専用線で工場へ鉱石を運びました。宮古精錬所では銅・鉛・亜鉛や硫酸が精錬され、過リン酸石灰･化成肥料なども製造されました。田老鉱山には、小学校･映画館･スーパーもあり、家族を合わせて人口２千人もの鉱山街となりましたが、ドルショックと銅価格の下落により 1971（昭和 46）年に閉山しました。宮古精錬所背後の山に建設された高さ 160 mの大煙突が現存し、かつての繁栄を物語っています。

戦後の宮古港修築

1951（昭和 26）年の第２期築港計画以来、出入国港・木材輸出入港・開港場・大豆輸出入港・検疫港に指定されるにつれて、宮古港は国際的にも重要な港に成長しました。1964（昭和 39）年には魚市場に面して１万ｔ級の船舶が接岸可能となり、1969（昭和 44）年には藤原埠頭に４万ｔ級岸壁が完成し、北東北でも有数の物流拠点へと発展を遂げます。

漁港としての宮古は、サンマ棒受網と北洋鮭・マス漁業の根拠地として全国的に知られるようになります。昭和 30 年代にはサンマの出漁解禁を持ち、300 隻以上のサンマ船が集結する盛況ぶりでした。

全国一のサンマ基地宮古港に480隻が集結　1959（昭和34）年９月

1976（昭和 51）年には公共埠頭の供用が開始され、宮古港の物流機能は閉伊川南岸の藤原埠頭を中心とした藤原・神林地区に移り、工業用地の造成も進められます。その後、客船の寄港も盛んとなり、1986（昭和 61）年には運輸省航海訓練所練習船「日本丸」と「海王丸」が入港、1990（平成２）年には東京・釧路間の定期フェリー「サブリナ」が試験寄港を開始しました。1999（平成 11）年には神林地区にマリーナ「リアスハーバー宮古」が竣工し、インターハイ（全国高校総体）ヨット競技会場となり、シーカヤックやウィンドサーフィンなどマリンスポーツの拠点として活用されています。

５　災害史

（１）津波

三陸海岸は 869（貞観 11）年以来、古くから大津波に襲われてきた地域です。1611（慶長 16）年の大津波から東日本大震災まで宮古地方に被害が記録された津波は、実に 15 回を数え、およそ 25 年に一度津波が襲来していることになります。三陸沿岸に甚大な被害をもたらした 1896（明治 29）年の明治三陸地震津波から 37 年後の 1933（昭和８）年の昭和三陸地震津波により、三陸海岸

は津波の常襲地と言われ、田老地域は「津波太郎」と呼ばれるようになりました。

これに伴って、明治の津波以後、大津波供養碑が建立されました。昭和三陸地震津波後には朝日新聞社主催の義援金によって大津波記念碑が各地に建立され、「地震の後には津波が来る」「高い所へ逃げろ」「ここより下に家を建てるな」といったメッセージが刻まれています。

田老地域の昭和三陸地震津波被害

表２-13　宮古地方を襲った主な地震・津波

● 1611（慶長 16）年 10 月 28 日 三陸地方で大地震、仙台・盛岡・津軽・松前藩領に津波来襲。14 時頃大津波で笠間（山口）・黒田・宮古が騒動し 17 時頃大方水が引いた。海辺通は一軒もなく波にとられ人多く死に、家をとられた人は路頭に迷った〔宮古由来記〕。
● 1677（延宝５）年３月 12 日 20 時から明け方まで 20 回以上の地震があり、北閉伊浦々へ大波（津波）寄せ、家・船・塩釜が波に取られる〔雑書〕。
● 1699（元禄 12）年 11 月８日 ８日より９日まで大潮にて海辺の場所によって家など取られる。津軽石では久保田渡りまで法の脇は稲荷（神社）の下まで波が来た〔日記書留帳〕。鍬ヶ崎浦で出火 20 軒焼失、13 軒破損。159 人へ御蔵米を少し配給した〔雑書〕。
● 1751（寛延４）年５月２日 14 時頃大槌通で大潮差し込み、敷き板下或は田畑苗代・町小路まで潮水あがる。嬉石 13 軒・両石浦 15 軒・安渡 60 軒・織笠 20 軒・大沢浦 50 軒の床下浸水〔雑書〕。
● 1762（宝暦 12）年 12 月 16 日 夜前に大地震、八戸で所々破損あり、南宗寺御廟並びに御仏殿破損〔八戸藩日記〕。鍬ヶ崎で意外に損害あり、赤前浦で網納屋破損〔釜石市誌〕。
● 1772（明和９）年５月３日 12 時頃大地震、盛岡城の石垣小破、花巻城所々破損。宮古通長沢で死者・死馬あり〔宮古吉田家文書〕。腹帯村・田老村・長沢村・川井村・箱石村で大岩崩れ死者あり〔雑書〕。大地震であったが津波がなく、「古人ハ草木青葉ノ節ハ津波之レナキコトヲ言残シ置キヌ」〔梅荘見聞録〕
● 1793（寛政５）年正月７日：**寛政南三陸沖地震**。 12 時頃大地震あり、陸中・陸前・磐城に津波寄る。宮古では川津波が３・４度遡上し山に逃げた。宮古町・藤原・磯鶏には波は余り寄せず、損害はなかった。２月中まで小地震あり、宮古・藤原では山に小屋をかけて避難した〔古実伝書記〕。
● 1837（天保８）年 10 月 11 日 真夜中、気仙郡・本吉郡に津波入り込み、今泉川（陸前高田市）の鮭川留が押し破られる。大船渡赤崎御塩場廻りの土手が押し破られ、塩 2,000 俵津波に取られる。大地震もなく津波があり不審〔小嶋家文書〕。
● 1843（天保 14）年３月 26 日 ６時頃大地震あり、海辺に津波寄せ、赤前で家痛む〔長沢災異記〕。八戸白銀村で津波に〆粕流失、海辺の小屋 14 ～ 15 軒程痛み、小船や鰯釜流失〔遠山家日記〕
● 1856（安政３）年７月 23 日：**安政大津波** 12 時頃強い地震があり、間もなく津波寄せる。宮古代官所前の往来に水上がり、鍬ヶ崎では小島あたりより大鍬ヶ崎（日立浜・角力浜）まで水上がる。鍬ヶ崎浦・高浜浦・金浜浦・赤前浦で居家の被害 108 軒〔内史略〕。
● 1896（明治 29）年６月 15 日：**明治三陸地震津波**。 19 時 32 分頃三陸沿岸で震度２程度の地震を感じる。約 30 分後、大音響と共に大津浪襲来、岩手県綾里村白浜で最大打上高 38.2 ㍍を記録、死者２万２千人。
● 1933（昭和８）年３月３日：**昭和三陸地震津波**。 ２時 31 分、三陸沿岸で震度 5 の激しい揺れがあり、30 分から 1 時間内に北海道から三陸地方を津波が襲った。岩手県で死者 1,408 名、行方不明者 1,263 名（岩手県昭和震災誌）。
● 1960（昭和 35）年５月 24 日：**チリ地震津波**。 南米チリのバルディビア沖で 23 日４時 11 分にモーメントマグニチュード 9.5 の世界最大の地震が発生。23 時間後の翌日未明に日本に到達、北海道から千葉県まで６同県と沖縄県で合せて 142 人の死者・行方不明者を出した。

● 1968（昭和 43）年５月 16 日：**十勝沖地震。** ９時 49 分に青森県東方沖を震源とするマグニチュード 7.9 の地震により、釧路から青森・岩手・宮城県北部の太平洋沿いに数㍍の津浪が発生した。津波は八戸・野田・宮古・大槌などで５ｍ以上となったが、干潮時に当たり、津波防潮堤の設置が進んでいたこともあり津波被害は軽くなった。
● 2011（平成 23）年３月 11 日：**東日本大震災。** 14 時 46 分に三陸沖、宮城県牡鹿半島の東南東約 130 ｍ付近を震源とするマグニチュード 9.0 の地震が発生。我が国の観測史上最大規模の地震により、巨大な津波が太平洋岸に押し寄せた。宮古市の被害は、死者 517 人（うち行方不明者 94 人）、住家被害 4,449 棟、非住家被害 4,639 棟、被災世帯（半壊以上）4,582 世帯、11,979 人であった。

＊月日は江戸時代までは和暦（太陰暦）、明治以後は太陽暦で表示。
＊被害状況の後に〔　〕で出典（資料名）を記した。
＊地震・津波の概要は、主に「日本歴災害事典」を参考にした。

（２）風水害

本市は大洪水に歴史上繰り返し襲われており、昔の大洪水「白鬚水」の伝説が各地に残されています。洪水の濁流に乗って白鬚の翁が流れ下るといった伝説で、1718（享保３）年に閉伊川が氾濫した「白鬚の大洪水」によって宮古街道が通行不能となりました。茂市地区では、1829（文政 12）年 12 月の「白鬚大洪水」で多くの犠牲者があり、供養碑「万霊塔」を建立しています。第二次世界大戦後間もなく、1947（昭和 22）年カスリン台風と 1948（昭和 23）年アイオン台風の連続台風が語り継がれています。

カスリン台風

1947（昭和 22）年９月 14 日から波状的な驟雨（しゅうう）にみまわれ、16 日まで降り続きました。16 日午前３時ごろに増水はピークとなり、宮古市内の浸水は 2,393 戸に及びました。閉伊川の洪水被害は、堤防決壊２箇所、護岸４箇所、道路８箇所、橋梁流失３箇所、耕地田畑 17 箇所、海湾で定置網、漁船等９千万円の被害が出ました。

アイオン台風

1948（昭和 23）年９月 15 日夜から降り出した雨は、16 日未明から次第に風雨を伴い、午後３時頃から翌朝にかけて激しくなりました。宮古で 24 時間の降水量は 249.3 ㎜に達し、閉伊川の宮古橋で６ｍの増水となりました。閉伊川の大小支流も氾濫して各地で被害が続出しました。早池峰山の北面（後のアイオン沢）で土石流が発生し、閉伊川で被害が大きくなったといわれ、森林損害は樹高 10 ｍ以上の樹木 14 万本以上でした。

1948（昭和23）年アイオン台風の水害　新川町

藤原地区では、堤防を破った閉伊川の濁流が地区の半分以上を押し流し空き地と化しました。死者 92 名、負傷者 172 名、流失家屋 171 戸、非住家 269 棟と悲惨を極めています。国鉄山田線の線路は至る所で寸断され、道路・通信も途絶したために、宮古地方は陸の孤島となりました。山田線の被害状況は、築堤流失 40 箇所、築堤決壊 50 箇所、線路流失 12、橋脚流失９などで、全線復旧は 1954（昭和 29）年 11 月で６年を要しました。

（３）大火

フェーン大火

1961（昭和36）年５月27日、第４号台風が温帯低気圧となって日本海を北進したため、三陸沿岸は強風が吹きました。５月の乾燥に加えてフェーン現象となり、異常乾燥と強風によって三陸沿岸２市３町３村で林野火災が発生しました。３日間も燃え続けた林野火災は、三陸フェーン大火とよばれる大災害となりました。本市では29日の午後２時頃、当時の新里村蟇目で炭窯から出火し、西南西の強風によって猛火は、宮古地域の山林及び田老地域の山野に燃え移っていきました。宮古地域では、岩船の山奥から田代へ延焼し箱石を経て、女遊戸（おなつべ）、松月の海岸集落の民家まで延焼しました。長沢の大野の山林からも出火し、津軽石を経て山田町豊間根（とよまね）に延焼し、宮古町の三方は火の海となって、市民は眠れぬ夜を過ごしたといいます。田老地域では三本木の山林から出火し、強風によって延焼、飛び火し、鋤ノ沢の田老鉱山を焼き尽くしました。火の手は海岸にも延びて、青野滝（あおのたき）、畑（はた）、樫内の３地区が全焼しました。

フェーン大火で全焼した女遊戸

６　暮らしと信仰

（１）生業

農業の暦

宮古・田老地域は、５月から６月に海上から吹く冷たく湿った気流、やませに悩まされてきました。また、北の青松葉山、南の早池峰連峰に挟まれた川井地域は、６月から７月まで冷たい「おぎしけ」、「がしかぜ」などと呼ばれる北東の風が吹いて冷夏をもたらします。山林が９割を占め、冷害が多く農作物に関して自然条件に恵まれない環境にあって、当地方ではさまざまな工夫と努力が重ねられてきました。

気候と耕地に比較的恵まれた山口や花輪地区では、春から秋に稲作が行われ、畑作物は主にダイコン、ゴボウ、ニンジンなどの根菜類が作られました。ダイズ、アズキ、ササゲなどの豆類も作られ、この間に２度の養蚕を行っていました。秋にイネの収穫が終わる頃、オオムギの種を蒔き翌年の初夏に収穫します。

稲作に適さない山間地では、ヒエ、オオムギ、ダイズの栽培が二年三作で行われ、ヒエが主食でした。春にヒエを蒔き、秋にヒエの刈り取りをして、同じ畑にオオムギを蒔きます。翌年の春にムギ刈りの前にうね間にダイズを蒔き、秋にダイズを収穫します。養蚕では春、夏の２回、繭をとりました。

山仕事

昭和30年代まで農家は、自家の農地と山林を一体として活用し、暮らしを支えてきました。春は「はるき」（薪）を伐って、秋から冬の燃料を準備します。その際、家を建てるとき必要なクリ、

ホオノキ、カツラ等の用材木は「たてき」として残し、将来の「やどこ」（家の屋根替え）に備えました。夏は適地を選んで「かの」（焼畑）を開いて「山まき」に利用し、農事の合間に「すりぱ」（枕木）削りを行って販売しました。農閑期には炭がまを築き、木炭を焼いて冬仕事にします。山で樹木の伐採や造材に携わる人を「そうま」（杣）と言い、「伐り方」が伐採し、「削り方」が切り倒した丸太を削って杣角に造材します。搬出する杣人を「出し方」と言い、雪を利用した「ばず橇」や、夏は「きんま」（木馬）で山から搬出しました。山から搬出した材木は、沢水を利用した「鉄砲堤」、閉伊川の雪代水を利用した「木流し」などで宮古まで運ばれました。

きんま（木馬）で薪を運ぶ

前挽き鋸を使って角材や板に製材する職人を木挽と言い、「やどこ」の際は大工と同格の職人でした。民謡「南部木挽唄」が有名で、旧川井村の時から南部木挽唄全国大会が開催されています。

地域による漁業の特色

宮古町は漁船経営が盛んで、戦前から沖合漁業を行う漁船主が多くありました。明治からカツオ漁業、イワシ巻網漁業、沿岸マグロ延縄漁業、イカ釣り漁業が盛んでした。戦後初期は、サケマス漁業、サンマ棒受け漁業が盛んでしたが、中期以降は近海マグロ延縄、遠洋カツオマグロ漁業、イカ釣り漁業、近海底引き網漁業が中心となりました。

水揚げされたマグロ　1935（昭和10）年頃

鍬ヶ崎地区は下町や日立浜を中心に漁師が多い町でした。大多数の漁師は、サッパ船という小さな磯船で、アワビ、ウニ漁、天然のワカメ・コンブ、イワノリ、マツモ、ツノマタ等の岸浜漁（磯漁業）と、ソイ、メバル、アコウダイ、アイナメ、カレイ等の零細な釣り漁業、刺網漁業を行いました。

磯鶏地区は、砂浜で半農半漁の地区でした。昭和初期までイワシやサケの地引網漁業が行われ、大正以後はイワシ繰り網漁が行われ、イワシ〆粕作りが盛んでした。高浜、金浜では戦前から湾内でノリやカキの養殖が盛んとなり、昭和30年代からはワカメ、コンブ、ホタテ等の養殖が導入されました。

高浜海岸の昆布干し　1952（昭和27）年

崎山地区も半農半漁で２割が漁業、８割が農業であったといいます。戦後間もない頃まで、稗、麦等雑穀類の耕作、薪炭、炭焼き等の農林業が主でした。漁業は天然のアワビ、ワカメ、コンブ等の岸浜漁に依存し、昭和40年代からワカメ、コンブ、ホタテの養殖が始まりました。

重茂地区も同様に半農半漁で、昭和40年代以降はワカメ、コンブの養殖に適した自然条件を活かし、県内有数の漁業地域となっています。

（２）信仰

仏教の展開

鎌倉・南北朝時代に開かれていた天台・真言系の顕密寺院が、戦国時代に曹洞宗に改宗していきます。これは、大名や在地領主である武家の菩提寺になったためです。奥州市水沢区の曹洞宗正法寺は、1362（康安２）年、二世月泉良印の時に、奥羽両国曹洞の本寺であることが認められます。月泉良印は早池峰大権現を信仰し、1394（応永元）年に小国地区寺倉に鶏頭山大圓寺を開創しました。1805（文化２）年に再建された本堂が市指定になっています。早池峰山登拝の際に鉄胎の岩屋に籠り、江繋地区桐内の寺平に草庵を結んだという伝説も残されています。

宮古地域では、鎌倉時代に天台宗の洞澤山華厳院が、閉伊氏の菩提寺として根城の麓に開創されたといいます。1489（延徳元）年に曹洞宗に改宗し、田鎖氏の屋敷跡（現在地）に再建されたとされています。津軽石払川の龍谷山瑞雲寺（曹洞宗）は、1399（応永６）年胆沢郡永岡村永徳寺出身の天産嘉瞬が沼里に草庵を構え、開創しました。

県指定 木造虚空蔵菩薩坐像

新里地域腹帯にある 1396（応永３）年の応永石塔婆碑（市指定）は、釈迦如来に六地蔵を梵字で配し、「正法眼蔵、涅槃妙心」と曹洞宗開祖道元の教えを刻んでいます。また、長根寺の木造虚空蔵菩薩坐像（県指定）には、1417（応永 24）年の墨書銘があり、造形も同年代の釈迦如来坐像（奥州市宝城寺・正法寺蔵、いずれも県指定）の禅宗彫刻に連なるものです。応永年間（1394-1427）を境に閉伊地方に曹洞宗が伝播し、江戸時代を通じて曹洞宗寺院が建立されていったと考えられます。

八坂神社（小国明神）

館神の信仰

鎌倉時代に鎮西八郎為朝の三男、閉伊頼基が幕府から閉伊地方の所領を安堵され、根城を居館としました。頼基は死後に田の浜（山田町）で水葬されて尾崎大明神（釜石市）となったと言います。そして彼の７人の重臣が閉伊七社明神となって、この閉伊地方を守護したという伝説があります。松山明神・老木明神・川崎明神（刈屋）・川井明神・川内明神・江繋明神・区界明神の七社で、閉伊川及びその支流の刈屋川・小国川沿いに分布しています。

また、閉伊氏の家門が栄え閉伊四十八郷と言われた中世には、各地に国人領主が館（城館）を築城し、館の鎮守を祀っていました。近世に館が破却された後、こうした館神が村の鎮守として祀られ、八幡宮や八幡神社となっています。田代・千徳・根城・赤前など多くの例が見られます。

県指定 獅子頭

修験の活躍

中世末期から近世にかけて、各地の修験者が村の神社

祭礼や加持祈祷・年中行事などに携わって活躍しました。山にあっては「山伏」、里にあっては「法印」と呼ばれ、聖なる山に籠もって修行し、験力を得て里で人々に現世利益を授けます。本山派修験と羽黒派修験のいずれかに属して宗教活動を行い、神社では熊野権現や新山（羽黒）権現・白山権現・諏訪明神などを勧請して祀りました。修験は権現様（獅子頭）を守護するため、当地方の神社には権現様が数多く残されています。また、修験者は江戸時代に流行した西国順礼の先達として、人々を日光・江戸・伊勢・熊野・京・大坂など全国各地の神社仏閣に案内しました。西国順礼によって、稲荷神社や八坂神社・賀茂神社など有名な神社が勧請され、数多くの石碑が建立されて現在に至っています。

山岳信仰と神楽

日本は国土の７割が山間地であり、日本人の信仰は古来、山岳信仰が基層となっています。修験者が守護神とした権現様を捧げ持って集落の家々を廻り、権現舞によって悪魔祓いや火伏せの祈祷を行ったのが神楽です。岩手県ではユネスコ世界無形文化遺産「早池峰神楽」（国指定）が有名であり、川井地域にはこの系統の神楽が継承されています。小国地区の末角神楽と江繋地区の江繋早池峰神楽が現存し、かつては門馬・川内・大仁田などにも神楽が伝承されていました。一方、沿岸部では山口地区の黒森神楽（国指定）が、全国的に類例のない長期で広範囲な巡行を行う廻り神楽として知られ、廻村巡行が現在も継続されています。

市指定 江繋早池峰神楽

死者供養と芸能

正月の神楽に対して、盆には鹿踊・剣舞・さんさ踊りが初盆の家を廻って集落の死者を供養しています。剣舞は田代（宮古・門馬）・牛伏・北川目・下刈屋・和井内・川内・江繋に伝承され、長刀・太刀・扇・綾などの持ち物を演目によって持ちかえて踊ります。区界地区の「田代念佛剣舞」（県指定）は、墓所や家の庭で御墓踊りを踊って、死者を供養する儀礼をよく残しています。

鹿踊は、鹿を模した頭をつけ、大きな幕を振りながら踊る幕踊り系鹿踊に分類されます。江繋・末角・湯澤の鹿子踊りはドロノキを削った「かんながら」を頭につけて踊ります。小沢・花輪・法の脇・和井内・茂市・蟇目・夏屋・箱石・川内の鹿踊は頭に紙ザイをつけます。

盛岡発祥のさんさ踊りは旧川井村に多く伝承され、集落の盆踊りとして踊られていました。沿岸部も婚姻や商いによって南川目と津軽石にさんさ踊りが伝わっています。「摂待七ツ物」と「川井御戸入」は神楽から発生した芸能です。漁業信仰が厚い沿岸特有の虎舞は、山田町大浦から津軽石藤畑へ、また大槌から内陸部の湯澤地区に伝わっています。太神楽も山田町大沢から津軽石新町へ伝わりました。箱石こうきりこ・川井豊年踊は女性が主役となる芸能です。

県指定 田代念佛剣舞